



宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における学
力向上の取り組み：
質問紙調査による全体状況の把握

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2013-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 宏美, 助川, 晃洋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4518

宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における 学力向上の取り組み －質問紙調査による全体状況の把握－

遠藤 宏美・助川 晃洋

**Measures to Improve Students' Academic Competence
in Combined Education in Elementary and Junior High Schools:
A Questionnaire in Kobayashi City, Miyazaki Prefecture**

Hiromi ENDO and Akihiro SUKEGAWA

I はじめに

宮崎県小林市は、平成21（2009）年4月から連携型小中一貫教育を全市的に導入している。平成20（2008）年11月に小林市教育委員会が発表した「小林市小中一貫教育基本計画」によれば、「小中一貫教育の基本理念」は、「児童生徒や地域の実態をふまえ、義務教育9年間を見通した系統性・一貫性のある小中一貫教育を小林市全小・中学校で導入し、保護者や地域との連携のもと、『知育』『徳育』『体育』『食育』のバランスのとれた教育活動を一丸となって推進することにより、自ら目標をもち、未来をたくましく生きぬく子どもを育成する」ことである。そして同じく「小林市小中一貫教育基本計画」によれば、小中一貫教育を通じて実現を「めざす児童生徒像」は、次の通りである。

- 知 … 基礎・基本を確実に身に付け、意欲的に学ぶ児童生徒
- 徳 … ふるさとを愛し、心豊かにたくましく生きる児童生徒
- 体 … すすんで運動し、体を鍛える児童生徒
- 食 … 望ましい食習慣を身に付ける児童生徒

このように小林市の小中一貫教育は、「知」、「徳」、「体」、「食」の「バランスのとれた教育活動」の「推進」を目指している⁽¹⁾。このこと自体については、おそらく誰にも異論の余地はないものと思われる。

それでも、「知」、「徳」、「体」、「食」のいずれもが、学校の研究と実践の中で、同じ重みを与えられて然るべきものであるとは、やはり到底考えられない。「知」の側面、すなわち児童・生徒の学力向上の問題こそが、他の三つに優先する最重要かつ喫緊の課題であると考えの方が自然であろうし、このような考えは、小林市の教育関係者の間でも、おそらくは共有されてきた（きている）ものと推測される。その根拠とみなし得るエピソードの一つとしては、小林市教育委員会が開催した平成21年度、平成22（2010）年度、平成24（2012）年度の小林市教育フォーラムの全体テーマが、いずれも「一貫教育と学力向上」であったことが挙げられる。

では、小林市の公立小・中学校においては、小中一貫教育の立場から、児童・生徒の学力向

上を目指して、どのような取り組みが行われているのであろうか⁽²⁾。この問いに対する研究レベルでの完全な回答を提示するには、言うまでもなく、市内のすべての小・中学校を対象とした相応の調査研究を蓄積することが不可欠であるが、そうした実証的な手続きのファーストステップには、全体状況の把握を目的とした質問紙調査こそが位置づけられるべきであると考えられる。しかしこれについては、従来から、その必要性を十分に認めつつも、実施を見送ってきた経緯がある。その理由としては、例えば、従来型の小・中学校教育から小中一貫教育へと体制を移行し、「小中一貫教育ならでは」の新しい教育実践を創造するには、準備と試行錯誤に要する期間が一定程度必要であると思われたこと、隣接する町村との相次ぐ合併を契機として、新たに小林市に参入することになった地区の小・中学校が、遅れてのスタートを余儀なくされたために、各中学校区間で実践の進捗状況や完成度に顕著な差が存在し、一律の調査を行うのが難しかったことなどが挙げられる。

しかしこうした問題は、現在の小林市において、すでにクリアされており（あるいは少なくとも、クリアされつつあり）、連携型小中一貫教育が定着し、軌道に乗りつつある。また年2回のペースで開催されている小林市小中一貫教育推進協議会や、いわばその下部組織として中学校区ごとに設置されている関係会合などにおいて、実践の点検・評価や効果の検証を行いながら、その改善や一層の充実に向けた議論が、活発に繰り広げられている。本研究は、こうした状況を踏まえて、いよいよ遂行されるに至ったものである。

II 研究の目的と方法

上記の背景を踏まえ、小中一貫教育の立場から、学力向上を目指してどのような取り組みがなされているかを概観するために、小林市内のすべての小・中学校を対象とした質問紙調査を企画した。調査票の作成に際しては、次の6点を柱とした質問を設定した。

- 1) 学校として、自校および中学校区の児童・生徒全体の、学力や学習に関する状況をどのように認識しているか。これは、児童・生徒全体の学力水準や学力分布の特徴などにより、学力向上を目指すにあたって学校が取るべき方策も変わると考えたからである。自校および中学校区の学力や学習に関する現状把握とともに、学力向上に向けた取り組みの方向性や課題などの傾向をつかむために設けた質問である。
- 2) 各学校の重点目標や、「知育」、「徳育」、「体育（食育を含む）」のうち、最も課題としていることは何か。先に触れたように小林市では、「知」、「徳」、「体」、「食」のバランスのとれた教育活動を推進しようとしている。しかし、どのようなことを課題として「重点的に」取り組むべきか、あるいは取り組んでいるかは、学校ごとに異なるはずである。そこで、学校として、具体的にどのようなことに重点を置いて教育活動を行っているか、また、「最も」課題としていることは何かを尋ねた。
- 3) 児童・生徒の学習支援や学力向上に向けて、どのような取り組みを取り入れているか。習熟度別指導や少人数指導・少人数学習などのほか、TTを活用した授業、ICTを活用した授業などが普及しているが、それらはどの程度積極的に行われているのかを把握する。また、放課後や休み時間、長期休業期間を利用した補習指導、家庭学習の習慣を身につけさせる指導など、授業そのものではないが学習支援や学力向上に寄与すると思われる周辺的な取り組みの実施についても尋ねた。なお、小中連携を活かした取り組みについ

ては、以下の4)で別の質問を設けた。

- 4) 小中連携を活かしてどのような学習支援・学力向上に向けた取り組みを行っているか。
上記3)で尋ねた取り組みのほかにも、小・中学校が連携することによりさらに円滑な学習支援が可能になったり、より学力向上が望めたりする取り組みがある。たとえば、異校種の教員どうしが協力して授業を行うことや、学力面で気になる児童・生徒に対して小・中学校合同で支援に当たることなどが挙げられる。また、小・中学校の教員が互いの授業を参観したり、合同で研修を行ったりすることにより、自らが受け持つ学校の授業や指導に活かされることもあるであろう。さらには、小学校と中学校とで大きく異なると言われる指導観や評価の方法、学習や学校生活の決まりなどについて検討し、統一や系統化を図る取り組みも考えられる。このような取り組みを実施しているかどうかを問う質問であるが、必ずしも「実施している」項目が多いほど「小中連携が進んでいる」程度の高さを示すとは限らない。そのため、具体的に「小・中学校の教職員の間で、児童・生徒の学習や学力に関する情報交換を、いつ、どのように行っているか」や、「学習指導要領を踏まえた『確かな学力』を育成するために、小中一貫教育を通してどのような具体的な取り組みを行っているか」など、自由記述による回答も求めている。
- 5) 小中一貫教育の仕組みを活かして学力向上に取り組む際、どのような困難を感じているか。上記4)で述べたように、小中一貫教育の仕組みを活かした取り組みは児童・生徒の学力向上に資すると考えられるが、一方で困難も多いと予想される。特に小林市のように施設一体型ではなく、連携型で小中一貫教育に取り組む際には、より難しさの程度が大きいと思われる。では、いったい何が大きな壁となって立ちはだかっているのか。時間の不足であるのか、それとも教員の人数や専門性の不足であるのか。あるいは小学校教員と中学校教員相互の理解不足であるのか。これらを含め、学校としてどのようなことに、そしてどの程度、困難さを感じているかを尋ねた。
- 6) 学校の教育活動や小中一貫教育に対して、保護者や地域住民から理解や協力を得られているか。児童・生徒の学力向上や学習習慣の定着には、家庭での適切なフォローを必要とする。そのため、保護者が児童・生徒の家庭学習について協力していることや、授業参観や学級懇談などに参加し、学校や児童・生徒に関心を向けていることは重要であると考えられる。また直接、学力向上に寄与するものではないが、小中一貫教育を含む学校運営を円滑に進めるために欠かせない、地域住民の教育に対する理解や協力に関する質問を設けた。

調査の概要は、以下の通りである。

- * 調査対象 (調査票配布対象) : 小林市立小学校 (全12校) および小林市立中学校 (全9校) の計21校
- * 回答者 : 学校の運営や小中一貫教育に深く携わっている教員 (校長、教頭、教務主任等を想定)
- * 有効回答数 : 21校 (有効回答率 : 100%)
- * 調査の方法 : 学校宛てに調査票を直接郵送し、同封した返送用封筒にて返送を依頼した。自由記述欄が多いため、ワープロを利用した回答を可能にした。その場合には、調査票のファイルをメールに添付して学校宛てに送信し、それに記入し

た回答を返信してもらうよう依頼した（この方法を利用した学校は1校のみであった）。

＊調査の期間：平成24年6月下旬から7月中旬

調査の実施や回収に関して補足する。各学校には、原則として平成24年度現在の児童・生徒の状況や学校の教育方針等について回答を求めているが、一部、平成23年度までの指導実施状況や卒業生の進路等を想定した回答を求めた部分もある。また、中学校区での取り組みに関して回答を求めた質問に対しては、同一中学校区の他校と相談したり回答を統一したりする必要はないことを申し添えた。回答した調査票に、可能であれば学校の概要や教育実践について記した資料等を同封して返送することを依頼したところ、6校から学校経営案や研究紀要の送付があった。

回収後、回答に不備が見られた部分については、FAXや電子メールを通じて学校に問い合わせ、内容を修正した。

調査の実施については小山市教育委員会の快諾を得たほか、調査票作成時には質問項目や言い回し（ワーディング）についての的確な助言をいただくなど、市教委の全面的な協力を得て行われたことを付記し、感謝を表したい。

調査対象校の基本属性は、以下の通りである。

①学校数

小学校 … 12校

中学校 … 9校

②中学校区の構成

小学校1校と中学校1校の組み合わせ … 6中学校区

小学校2校と中学校1校の組み合わせ … 3中学校区

③学校規模（特別支援学級を除く）

小学校 6学級（1学年1学級）未満 … 1校

6学級以上12学級未満 … 8校

12学級（1学年2学級）以上 … 3校

中学校 3学級（1学年1学級）以上6学級未満 … 4校

6学級（1学年2学級）以上 … 5校

Ⅲ 結果と考察（1） ～校種別～

対象校が21校と少ないため、今回の調査の結果に対して統計学的な解析は施していない。しかし、小学校全体と中学校全体の数値を示すことにより、市全体でどのような取り組みがなされているのか、校種による違いがあるのかを把握することが容易になると考える。そこで以下ではまず、単純集計結果を概観するとともに、校種別に見た場合に特筆すべき項目を取り上げて考察する。

用いたデータはその都度提示するが、巻末に添付した資料1（調査票および校種別単純集計結果）も、適宜、参照願いたい。

(1) 学力・学習状況に対する認識

図1は、自校の児童・生徒の学力の状況を全体として見た場合に、全国平均と比べてどのような状態にあるかを尋ねた結果である。小学校に比べて中学校のほうが「やや上回る」とした割合が高いものの、「全国平均並み」を含めると、どちらも全体の3分の2の学校が平均以上の学力水準にあると認識しているようである。

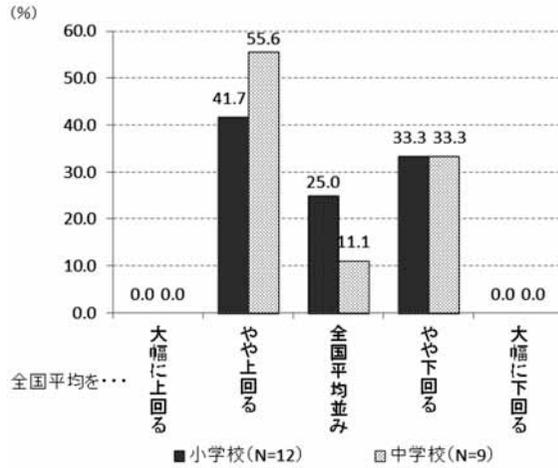


図1 自校の児童・生徒の学力の状況（校種別、単位：％）

図2は、中学校区の児童・生徒全体の学力の状況について尋ねた結果（「とてもよくあてはまる」と「ややあてはまる」の回答のみを表示）である⁽³⁾。

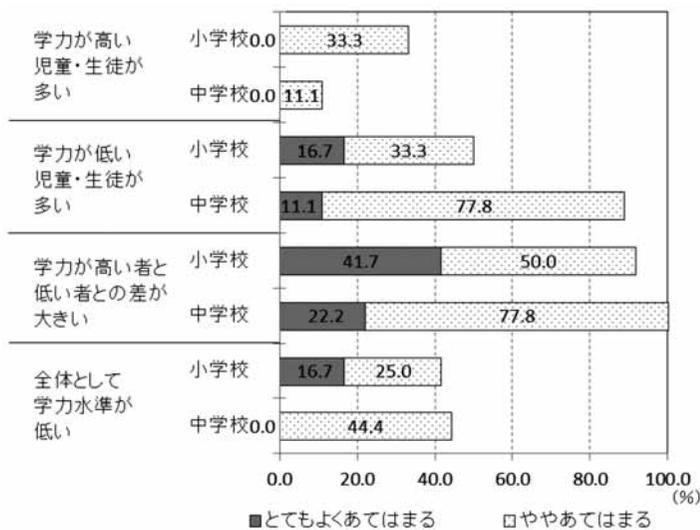


図2 中学校区の児童・生徒の学力の状況（校種別、単位：％）

「学力が高い児童・生徒が多い」と回答した学校は小学校に多く、反対に「学力が低い児童・生徒が多い」と回答した学校は中学校に多く見られた。つまり、中学校のほうが幾分シビアに児童・生徒の学力についての現状を把握していると考えられる。一方、「学力が高い者と学力が低い者との差が大きい」という項目や「全体として学力水準が低い」という項目に関しては、小学校・中学校ともほぼ同じ割合で（「とても」と「やや」の違いはあるものの）「あてはまる」と回答しており、小・中間の認識に大きな違いはないようである。

さらに、児童・生徒の学習に関して、具体的にどのような特徴や困難を認めているかを示したものが図3である。「授業に集中できない児童・生徒が多い」と回答した小学校は半数を超え（ $58.3\% = 「とてもあてはまる」8.3\% + 「ややあてはまる」50.0\%$ ）、中学校（「とてもあてはまる」 0.0% 、「ややあてはまる」 33.3% ）よりも困難に感じている割合が高い。

一方、「家庭学習に積極的に取り組む児童・生徒が多い」ということについて小学校では 58.3% 、中学校では 22.2% が「あてはまる」と回答していることから、中学校では家庭学習への取り組みが課題となっていることが窺える。

「小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」ということについては、小学校の 41.7% 、中学校の 66.7% が「ややあてはまる」と回答している。小・中学校ともに、小学校段階での学習内容が十分に理解できていないことに課題を感じているようであるが、その割合が中学校に高く見られることは、中学校でその問題がより顕在化することを示していると考えられる。

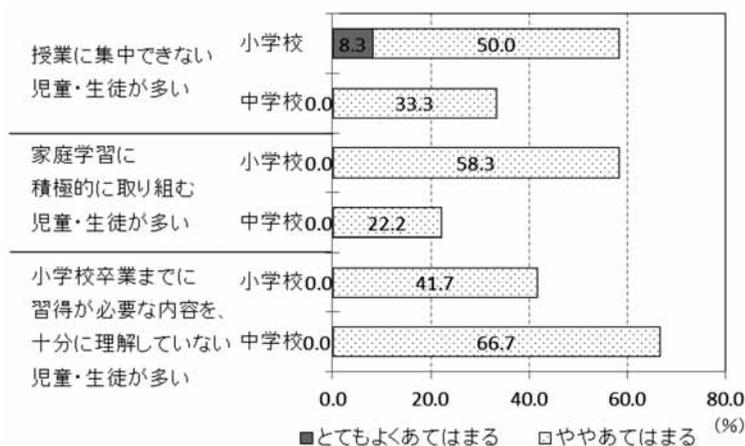


図3 中学校区の児童・生徒の学習に関する困難（校種別、単位：％）

（2）重点目標

図4は、自校が教育活動を行う上で重点を置いていることを尋ねた結果である（3つまでの複数回答）。小学校・中学校ともに最も多かった回答は、「すべての児童・生徒に、基礎学力を身につけさせること」であった。なかでも小学校は 91.7% とほとんどすべての学校が、基礎学力を身につけさせることを重要視していることは注目すべきである。

次いで、小学校では「基本的な生活習慣を身につけさせること」（ 50.0% ）、「学習習慣を身につけさせ、主体的に学習に取り組む児童・生徒を育むこと」、「郷土を愛し、地域に誇りが持て

る児童・生徒を育むこと」、「正しい食習慣を確立させ、健全な身体を育むこと」（いずれも同率で33.3%）と続く。小学校では、「基礎」や「基本」、「(学習や食の)習慣」を身につけさせることをより重要視していると考えられる。

中学校では、「自分に自信や誇りを持てる児童・生徒を育成すること」（66.7%）、「学校全体としての学力水準を上げること」（44.4%）と続く。小学校で確立した「基礎」や「習慣」を踏まえた目標を掲げて教育活動を行っている様子が見て取れる。

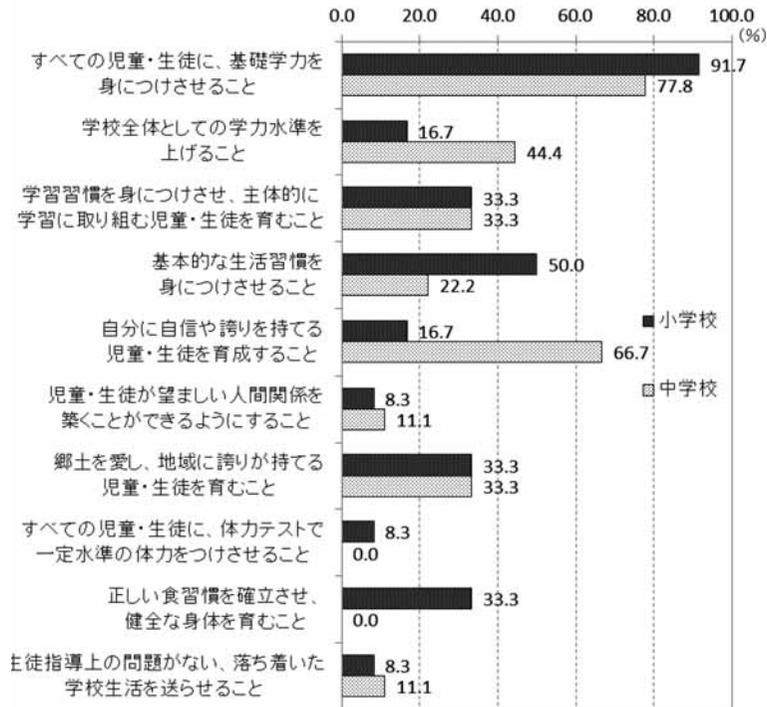


図4 教育活動における重点目標（3つまでの複数回答、校種別、単位：%）

なお、「知育」、「徳育」、「体育（食育を含む）」のうち、自校が最も課題としていることを尋ねたところ、小・中学校ともすべての学校が「知育」と回答した。各学校が「知」、「徳」、「体」、「食」のバランスのとれた教育活動を目指してそれぞれに取り組んでいる中で、すべての小・中学校が「知育」を最重要視しているということは、学校として当然のこととはいえ注目に値する。

（3）学力向上に向けた取り組み

では、学力向上に向けて、具体的にどのような取り組みを実施しているのであろうか。図5は、学力向上に資すると考えられるさまざまな指導・教育方法を、どの程度積極的に取り入れているかを校種別に示したものである。なお、図5では、とても積極的か、やや積極的かという「程度」と併せて、「実施していない」割合も示している。

まず、小・中学校ともに「積極的に実施している」割合が高いのは、「家庭学習の習慣を身に

つけさせる指導」(小学校:100.0%、中学校:77.8%。以下、カッコ内の数値は「とても積極的に実施している」と「やや積極的に実施している」を合わせた割合を示す)である。先に(2)で見たように、小学校では「基礎学力を身につけさせること」や「学習習慣を身につけさせ、主体的に学習に取り組む」ことに重点を置いている学校が多い。このことが、特にすべての小学校で家庭学習の習慣の確立を重視した指導を積極的に行うことにつながっていると考えられる。また「ICTを活用した授業を行うこと」も、小学校で83.4%、中学校で66.7%と高い。

そのほかの項目について、小学校と中学校の割合を比較してみよう。中学校より小学校で積極的に行われている指導・教育方法には、「習熟度別指導」(小:58.3%>中:33.3%)、「少人数指導・少人数学習」(小:66.7%>中:55.5%)、「自校の教員を活用したTTによる授業」(小:41.7%>中:0.0%)などがある。特に、「少人数指導・少人数学習」を「積極的に実施している」と回答したすべての小学校(66.7%)が、「とても積極的に」の回答であった。このことから、「少人数指導・少人数学習」には中学校に比べ小学校のほうが、より積極的に取り組んでいるようである。

逆に、小学校より中学校で積極的に実施している割合が高いのは、「放課後や休み時間等の補習指導」(小:58.3%<中:88.9%)、「長期休業中の補習指導」(小:16.6%<中:100.0%)である。特に、全中学校が実施していると回答した「長期休業中の補習指導」について、小学校では41.7%が「実施していない」と回答している。これらのことから、「補習指導」の実施については、校種による取り組みの差があることが見て取れる。

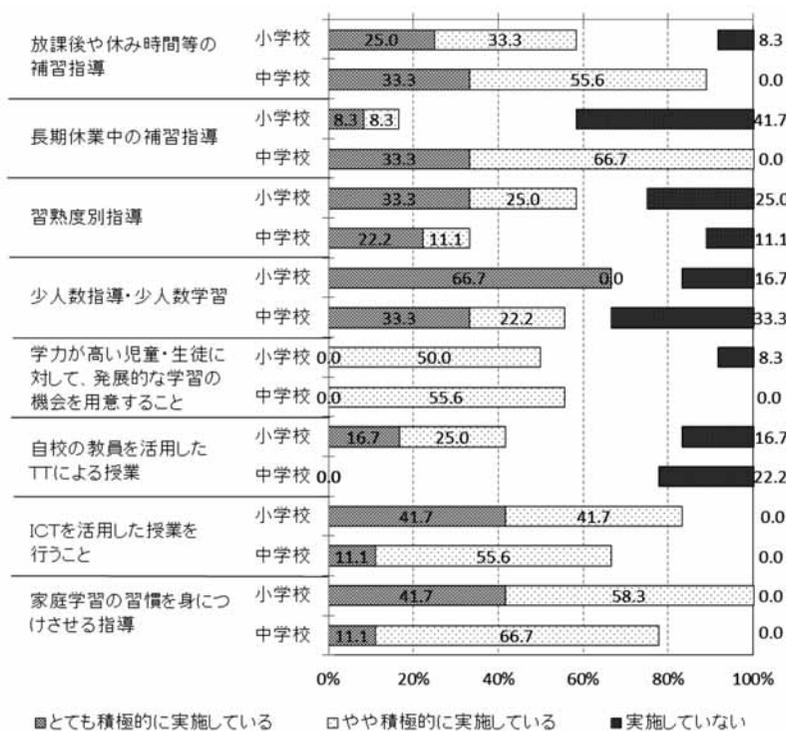


図5 学力向上に向けた取り組み(校種別、単位:%)

補足すると、「習熟度別指導」を取り入れている学校（小：58.3%＝7校、中：44.4%＝4校）に対し、どの学年・教科に導入しているかを別の質問で尋ねたところ、小学校では3年生以上の算数に取り入れている場合が多く、各学年とも85.7%の学校（6校）が取り入れていた。中学校では、「習熟度別指導」を取り入れているすべての学校（4校）で、全学年の数学で取り入れているほか、英語に取り入れている（中学1・2年生：75.0%＝3校、中学3年生：100%＝4校）。すなわち、「習熟度別指導」は算数・数学で導入されやすいといえる。

（4）小中連携を活かした学習支援・学力向上に向けた取り組み

児童・生徒の学習支援や学力向上を目指して、小・中学校が連携してどのような教育活動を行うことが可能であり、また実際に行っているのであろうか。表1は、児童・生徒の学力向上や学習支援に向けて、小中連携を活かして行われた取り組みの実施率について示したものである。

①教員どうしの連携

小学校・中学校ともにすべての学校で実施しているのは、「教員が相互に授業を参観すること」である。その回数や参観対象の学年・教科等については問うていないため不明であるが、少なくとも小林市の小・中学校では、教員が互いの校種を越えて授業を参観することが珍しいことではなくなっていると考えられる。また、教員が校種を越えて合同で「児童・生徒の学力についての分析を行うこと」（小：100.0%、中：88.9%）や「学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと」（小：91.7%、中：100.0%）も、ほぼすべての学校で取り組んでいることが見て取れる。小・中学校の教員が互いに授業を参観しあったり、合同で学習指導に関する研修を行ったりすることにより、それぞれの指導方法の違いや児童・生徒の発達段階や学習内容の違いを知ることにつながる。このような教員どうしの連携は、小中連携を活かした取り組みの中でも初期の段階で着手すべきことであると考えられ⁽⁴⁾、小林市の小中一貫教育はその段階を順調にクリアし、取り組みが定着しているといえよう。

「系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること」は約半数（小：58.3%、中：44.4%）、「評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること」は小学校33.3%、中学校11.1%が実施している。小・中学校合同で評価を含めたカリキュラムの検討を行うことは次の段階として考えられ、現時点での実施率はまだ高くない。

また、基礎学力の保障という点では、「学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること」が、特に小学校から中学校への移行期において効果的であると考えられるが、それを実施している割合は平均で38.1%（小：33.3%、中：44.4%）と決して高くはない。特定の児童・生徒へ支援を行うことに躊躇しているのか、小・中学校が合同で支援に当たることが難しいのか（あるいはその必要性が認められないのか）は、この回答からは読み取ることができないが、支援を行うべき児童・生徒の情報を小・中学校で共有することにより、学力の定着・向上をはかることができるのではないだろうか。

②「乗り入れ指導」

小学校から中学校への進学の際に生じる不安を軽減したり、中学校での学習への興味関心を高めたりするために、小学校教員が中学校の授業を、中学校教員が小学校の授業を行う「乗り入れ指導」が推奨され、広く取り組みが行われている。小林市においては、「他校種の教員が単

独で、授業を行うこと」が小・中学校とも8割を超え（小：83.3%、中：88.9%）、「他校種の教員がTTとして、授業に入ること」も半数を超えており（小：57.1%、中：55.6%）、多くの学校で「乗り入れ指導」が行われている。連携型で小中一貫教育をすすめているため、校舎が離れている小学校と中学校との間で、教員の行き来や授業の進め方等に関する調整など容易ではないにもかかわらず、「乗り入れ指導」に精力的に取り組んでいるといえよう。

別の質問で、単独かTTかは問わず、実際に教員が他校種の学校へ「乗り入れ」ている学年、教科、頻度などを尋ねているので、確認しよう（図表は省略）。中学校から小学校へは、1校が音楽で小学校1年生から行っているほかには5・6年生に集中しており、音楽、算数、国語、理科、社会、体育、家庭科で中学校教員による授業を行っている。頻度を見ると、毎週定期的な授業を行う学校や教科がある一方で、「年1回」や「学期に1回」など限定的に行う学校も見られた。小学校から中学校へは、家庭と音楽について3年間、小学校教員が授業を行う学校があるほかは、1校で中学校1年生の数学にのみ「乗り入れ指導」を行っている（週2時間）。以上のことから、体育や音楽、家庭科については小・中学校とも学年を問わず、相互に「乗り入れ指導」が行われやすいが、その他の教科（国語、社会、算数・数学、理科、外国語）については小学校5・6年生および中学校1年生の時期に集中して「乗り入れ指導」が行われる傾向にあるといえよう。特に算数・数学で多く行われているようである。

なお、「乗り入れ指導」を円滑にすすめるために不可欠であると思われる、「中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること」については、全体で33.3%と実施率が低くなっている。小・中学校間で標準の1単位時間の規定や休み時間などの考え方に違いがあり、校時程の調整は簡単ではない。また、学校間の移動距離が長かったり、授業を担当する教員が確保できなかったりすれば、校時程が調整できたとしても必ずしも「乗り入れ指導」の実現・増加に結びつくとは限らない。とはいえ、校時程を調整する過程で、小学校と中学校との間で児童・生徒および教員の行動の特性や違いを知ることができ、小中一貫教育にとってのメリットは大きいはずである。

③指導の一貫性・系統性

「授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること」（小：100.0%、中：77.8%）や「家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること」（小：91.7%、中：88.9%）、「校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること」（小：58.3%、中：66.7%）なども実施率が高い。これらは授業や教科等の指導そのものではないが、児童・生徒の学習を支える重要な取り組みであり、小・中学校を通じて指導を行うために一貫性や系統性を図ることに力を入れているといえる。

一方、「家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること」は、小学校91.7%、中学校44.4%と実施率に大きな差がある。中学校区での取り組みであるため、小学校と中学校とで回答に大きな差が出ることは考えにくいのであるが、おそらく「すべての教員に取り組みが浸透しているかどうか」という点などにおいて、校種によって認識に差があるのではないかと考えられる。図5で見たように、小学校では家庭学習の習慣を身につけさせる指導に力を入れており、かつ学級担任が一人で行うため家庭学習の指導を徹底しやすく、逆に中学校では家庭学習の指導を複数の教科担任が担当することによる難しさがあるのではないだろうか。

表1 小中連携を活かした学力向上・学習支援に向けた取り組みの実施率（全体、校種別、単位：％）

小中連携を活かした学力向上・学習支援に向けた取り組み	全体	小学校 (N=12)	中学校 (N=9)
小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること	100.0	100.0	100.0
中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析を行うこと	95.2	100.0	88.9
中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと	95.2	91.7	100.0
授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	90.5	100.0	77.8
家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること	90.5	91.7	88.9
他校種の教員が単独で、授業を行うこと	85.7	83.3	88.9
中学校区で共通の「家庭学習の手引き」を作成するなどして、家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること	71.4	91.7	44.4
校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	61.9	58.3	66.7
他校種の教員がTTとして、授業に入ること	57.1	58.3	55.6
小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること	52.4	58.3	44.4
学習や生活に関する家庭向けの通信を、中学校区として発行すること	47.6	41.7	55.6
通常の授業以外で他校種の教員が授業を行うこと	47.6	33.3	66.7
学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること	38.1	33.3	44.4
中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること	33.3	41.7	22.2
小・中学校合同で、評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること	23.8	33.3	11.1

（5）小中一貫教育に取り組む中で感じる困難

小林市が小中一貫教育の取り組みを始めて4年目（合併のため、遅れて開始した地区では2年目）になる。すでに示してきたように、小中一貫を活かしたさまざまな教育活動が行われてきているが、おそらく同時に、難しさも感じていることと思われる。

図6は、小中一貫教育の仕組みを活かして学力向上に取り組む際に「感じている」（「かなり感じている」と「少し感じている」の合計）と回答した割合を、校種別に示したものである。すると、「小・中学校間で、連絡を取り合ったり情報を共有したりする機会が少ないこと」の中学校の回答が88.9%（「かなり感じている」11.1%＋「少し感じている」77.8%）と高く、小学校のそれ（「かなり感じている」0.0%＋「少し感じている」25.0%）との差が大きいことが目立つ。この差は、「小学校と中学校との距離が離れていて、行き来に時間がかかること」（小：33.3%、中：33.3%）や「小・中学校の教員が集まって話し合う時間が確保しにくいこと」（小：58.4%、中：66.7%）、「他校種の授業を参観したり、乗り入れ授業を行ったりするための時間が確保できないこと」（小：50.0%、中：66.7%）といった項目に比べて大きいことから、単純

に学校間の距離が離れていることや時間が不足していることが問題なのではないようである。中学校は小学校に対し、連絡を取り合ったり情報を共有したりすることを望んでいるが、小学校では中学校ほど、そのような機会を必要としないという意識のギャップが窺える。

とはいえ、上記の「時間が確保できない」ことへの回答の結果からは、相互に授業を参観したり合同で研修等を行ったりするために必要な、学校間での時間調整が容易ではないという現実も垣間見える。小学校教員は学級担任制のため、授業を担当しないいわゆる「空きコマ」はほとんどないが、児童が下校した後にまとまった時間を確保できる可能性が中学校に比べて高いと考えられる。一方中学校教員は教科担任制のため、担当する授業がない「空きコマ」を確保できるが、放課後には部活動の指導などで拘束されることがある。すなわち、小学校と中学校の教員が一同に会する機会を設定することが難しく、小・中学校ともに半数以上の学校が「時間の確保」に困難を感じているのである⁽⁵⁾。

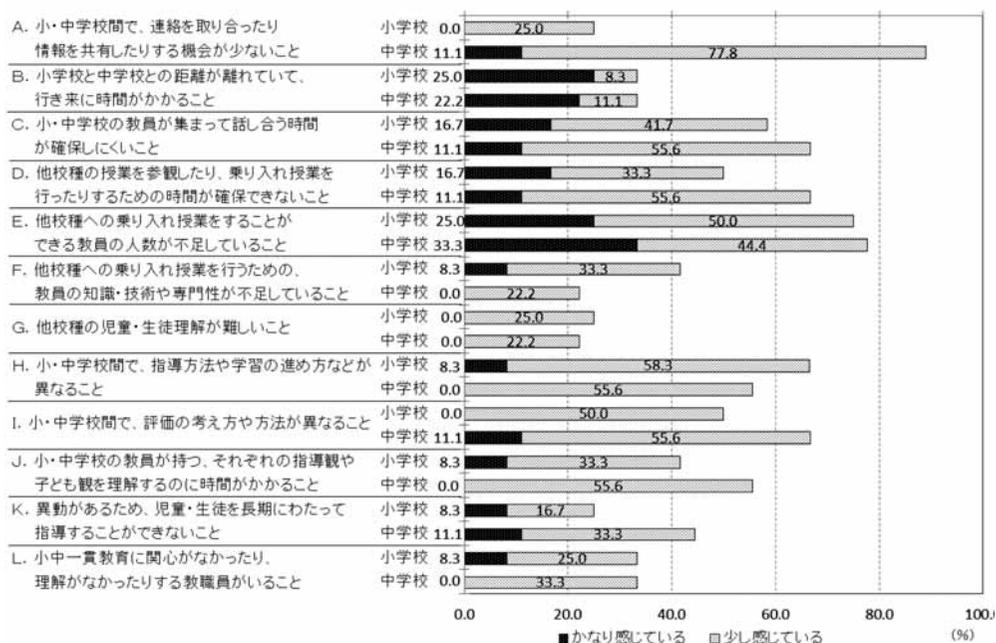


図6 小中一貫教育に取り組む中で感じる困難（校種別、単位：％）

(6) 保護者や地域住民の、学校や教育に対する理解や協力

児童・生徒の学力向上や学習を陰で支えることとなる、保護者や地域住民の学校や教育に対する理解・協力に関する回答を、図7に示した。小学校・中学校とも「学校の教育活動や行事等に協力」する保護者は多く、9割前後に及ぶ。しかし、「授業参観や学級懇談に出席する保護者」は小学校のうちは8割以上が「多い」（「かなり多いと思う」25.0％と「やや多いと思う」58.3％の合計）と回答した一方、中学校のそれは66.7％と少なく、しかも「かなり多いと思う」と回答した学校が1校もない。子どもが中学生になると学校へ足を運ぶ保護者が少なくなるようであることがわかる。さらに「児童・生徒の家庭学習に協力する保護者」は、小学校で75.0％

の学校が「多いと思う」（「かなり多いと思う」16.7%＋「やや多いと思う」58.3%）と回答するものの、中学校では33.3%（「かなり多いと思う」11.1%＋「やや多いと思う」22.2%）に減少する。中学校段階で、保護者に家庭学習への協力を求めるのは難しいようである。加えて、「小中一貫教育に対する理解のある保護者」も、小学生の保護者（83.3%＝「かなり多いと思う」33.3%＋「やや多いと思う」50.0%）のほうが、中学生の保護者（66.7%＝「かなり多いと思う」0.0%＋「やや多いと思う」66.7%）よりも多いようである。なぜ小林市の小・中学校は小中一貫教育に取り組んでいるのか、小中一貫教育は児童・生徒の学力向上にどのような効果が期待できるのか、小中一貫教育において家庭学習はなぜ大切なのか、といった、学力と小中一貫教育の関連性について、特に中学生の保護者の理解を得る必要があると思われる。

地域住民にも同様の傾向が見られ、中学校に対して協力や参加をする地域住民は、小学校と比較すると概して少ないようである。特に「学校公開」への参加が多い地域住民は、小学校の50.0%（「かなり多いと思う」16.7%＋「やや多いと思う」33.3%）に対し、中学校では「やや多いと思う」に22.2%のみの回答となっている。小中一貫教育に対する理解の点でも同様に、中学校の回答の割合が小学校に比べて低い。

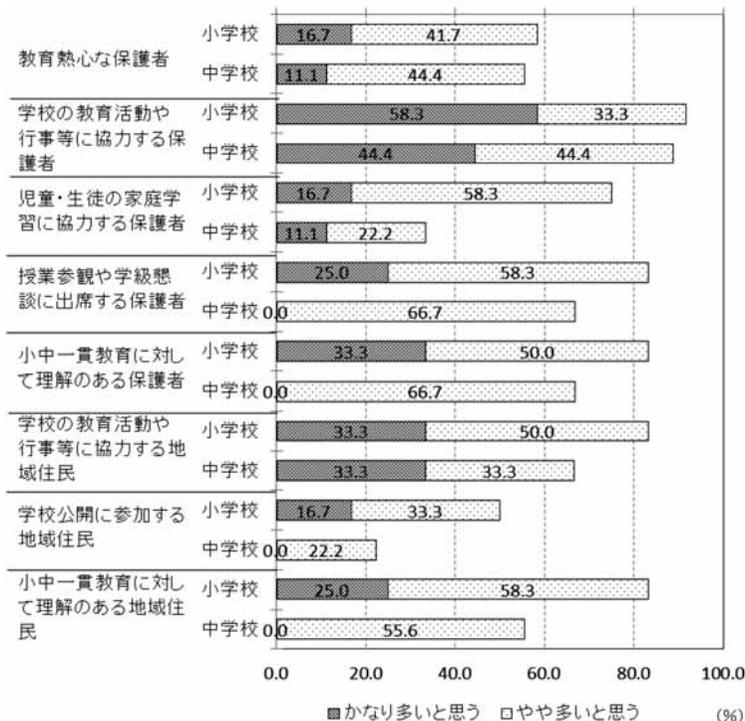


図7 保護者・地域住民の、学校や教育に対する理解や協力（校種別、単位：%）

IV 結果と考察（2） ～中学校区別～

中学校区別に、小・中学校が連携して学力向上に対してどのように取り組んでいるのかを概

観する。主なポイントは、学校および中学校区の特徴と、「児童・生徒の学力や学習状況の実態をどのように認識し、そこから課題と推測されることに対してどのような方策をとっているか」ということである。ただし、以下の考察は、あくまでも児童・生徒数や教職員数、学校の位置関係など公表されている基本情報と、今回の質問紙調査の結果から窺い知ることができることにとどめ、詳細な検討は別に計画する訪問調査等の結果を待つこととしたい。

なお、以下では学校名は匿名とし、中学校については大文字のアルファベットで、小学校については対応する小文字のアルファベットで表している。1つの中学校区に複数の小学校がある場合には、アルファベットの後ろに数字を組み合わせ、区別することとする。考察で用いたデータは、紙面の都合上、巻末にまとめて掲載する（資料2「回答一覧」および資料3「自由記述一覧」を参照されたい）。

(1) A中学校区

A中学校区は、A中学校とa1小学校、a2小学校とからなる、いわゆる「2小・1中」の組み合わせである。小学校どうしは1km程度離れており、またそれぞれの小学校からA中学校までは、1.5km前後の距離がある。

児童・生徒の学力は、A中、a1小、a2小とも「全国平均をやや上回る」と回答しているほか、「(中学校区)全体として学力水準が低い」かどうかについても、3校とも「あまりあてはまらない」と回答していることから、中学校区全体として学力水準はやや高いと考えられる。また、「授業に集中できない児童・生徒が多い」、「学習習慣が身につけていない児童・生徒が多い」、「小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」のそれぞれの項目についても「あまりあてはまらない」と回答が一致する。さらに「学習意欲が高い児童・生徒が多い」項目に3校とも「ややあてはまる」と回答しており、小学校から中学校にかけて、学習の態度や習慣、意欲について高いレベルで維持されているとみられる。

具体的な取り組みとして特徴的であるのは、「少人数指導・少人数学習」に3校とも「とても積極的に実施している」ことである。A中学校区の3校は、児童・生徒数が比較的多いのであるが、積極的に少人数指導・少人数学習に取り組むことによって、きめ細やかな指導はかかっているものとみられる。また、習熟度別授業は算数・数学科で取り組んでおり、小学校3年生から中学校3年生までと長期間にわたっている。さらに3校とも「家庭学習の習慣を身につけさせる指導」にも積極的に取り組んでおり、学習習慣の定着に結びついていることが窺える。

(2) B中学校区

B中学校区は、B中学校とb小学校の「1小・1中」の組み合わせである。B中とb小との距離は400m程度である。

児童・生徒の学力は全国平均並み、あるいはやや下回る程度とみられる。小・中学校ともに「学力が低い児童・生徒が多い」と「全体として学力水準が低い」に「ややあてはまる」と回答しているほか、「学力が高い者と低い者との差が大きい」に「とてもあてはまる」と回答しており、児童・生徒の学力分布に幅があり、かつ低い方に偏っていることが推測される。「学習習慣が身につけていない児童・生徒が多い」、「小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」に2校とも「ややあてはまる」と回答し、「学習意欲が高い児童・生徒が多い」、「家庭学習に積極的に取り組む児童・生徒が多い」に「あまりあてはまら

ない」と回答していることから、家庭学習を含めた学習習慣および基礎学力の定着と学習意欲の向上が課題となっていると考えられる。

しかし、「習熟度別指導」や「少人数指導・少人数学習」、「放課後や休み時間等の補習指導」を小・中ともに積極的に実施しているほか、「中学校のサマースクールに小学校職員が参加し、小学校の内容が十分理解できていない生徒に対して指導や声掛け」（自由記述）などを行っている。

(3) C中学校区

C中学校区は、C中学校とc1小学校、c2小学校とからなる、「2小・1中」の組み合わせである。C中学校とc1小学校とは道路を挟んでほぼ隣接しているが、c2小学校はC中学校から8km程度、車で20分ほどの距離と離れている。

児童・生徒の学力は、C中とc1小は「全国平均をやや上回る」と回答している一方、c2小は「全国平均をやや下回る」と差がみられる。このことは、C中学校の回答によると「中学校区内の複数の小学校間で、学力水準に差がある」に「ややあてはまる」との認識であり、2小学校間の学力の差に課題がありそうである。ただし、c2小学校は全児童数が20名を割り込む小規模校で複式学級を編制しているため、単純に学校間の学力水準の差とはいえない可能性があることに留意したい。

またc2小学校はC中学校との距離もあることから、小中連携は難しいように思われる。しかしながら、「中学校区で、小・中学校間の校時程の調整」を図り、児童や教員の移動に配慮するなどの工夫が見られる。

C中学校区の課題は、「学習習慣が身につけていない児童・生徒が多い」こと（c1小・c2小が「ややあてはまる」と回答）であるとみられる。特に小学校2校では「家庭学習の習慣を身につけさせる指導」を「やや積極的に実施」しているほか、自由記述の回答によれば、中学校区として小中9年間の発達段階に応じた共通の「家庭学習の手引き」を作成し、保護者への啓発もはかっているという。

(4) D中学校区

D中学校区は、D中学校とd小学校の「1小・1中」の組み合わせである。D中とd小との距離は約600mである。

児童・生徒の学力についての認識は、d小が「全国平均をやや下回る」のに対し、D中が「全国平均をやや上回る」としている。これらの回答が現状を正しく反映しているものであるとすると、中学校で学力が向上したか、小学校から着実に学力を定着させていったことが考えられ、どのような取り組みがそれに寄与したのか興味深い。d小は「学力が低い児童・生徒が多い」と「全体として学力水準が低い」に「とてもよくあてはまる」と回答しており、特に小学校段階での学力の低さが課題となっているようである。

D中学校区は児童・生徒数および学級数が少ないためか、習熟度別指導や少人数指導・少人数学習は実施していない。しかし、「放課後や休み時間等の補習指導」を「とても積極的に実施している」（D中）ほか、「業前に時間を設け、基礎・基本的な知識・技能の習得を図っている」（d小、自由記述）など、児童・生徒の実態に合わせて柔軟に対応した教育活動を行っていると思われる。

(5) E 中学校区

E 中学校区は、E 中学校と e 小学校の「1 小・1 中」の組み合わせである。E 中と e 小とは約500m離れている。

小・中学校とも、児童・生徒の学力は「全国平均をやや下回る」と回答しているほか、「学力が低い児童・生徒が多い」、「学力が高い者と低い者との差が大きい」、「全体として学力水準が低い」に「とてもよくあてはまる」と「ややあてはまる」と回答しており、児童・生徒全体の学力水準の低さや学力の分布に課題がありそうである。「授業に集中できない児童・生徒が多い」、「小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」、「学力不足のために、希望する高校への進学が難しい生徒が多い」のそれぞれに、2校とも「ややあてはまる」と回答していることから、小学校段階での学習内容の未定着が中学校卒業まで尾を引いていることが推測される。しかし、「学習意欲が高い児童・生徒が多い」ことに両校とも「ややあてはまる」としており、そこに突破口があるようにも見受けられる。

このような実態を踏まえ、E中・e小とも、「放課後や休み時間等の補習指導」や「家庭学習の習慣を身につけさせる指導」には積極的に取り組んでいる。また、市からICT教育の研究指定を受けていることもあり、「ICTを活用した授業」も「とても積極的に実施」しており、特にe小は「常時、電子教科書や枠型大型デジタルテレビ、実物拡大機を活用し」（自由記述）、児童の学習意欲を高める工夫をしているようである。

(6) F 中学校区

F 中学校区は、F 中学校と f 小学校の「1 小・1 中」の組み合わせである。F 中と f 小との距離は約600mである。

「全国平均並み」（f小）、「全国平均をやや上回る」（F中）というF中学校区の児童・生徒の学力は、「学力が高い児童・生徒が多い」ことに両校とも「ややあてはまる」、反対に「学力が低い児童・生徒が多い」や「全体として学力水準が低い」ことに「あまりあてはまらない」とした回答からも裏付けられそうである。しかし、「学力が高い者と低い者との差が大きい」については2校とも「ややあてはまる」としており、全体としての学力水準は高いものの、児童・生徒間の学力の差は大きいようである。「小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」には「あまりあてはまらない」、「学力不足のために、希望する高校への進学が難しい生徒が多い」に対しては「まったくあてはまらない」（F中）、「あまりあてはまらない」（f小）としていることから、小学校段階で確実に学習内容を習得し、それが高校進学へつながっていると見ることができる。

F 中学校区では、「長期休業中の補習指導」に積極的に取り組んでいるようである。また、f小では「5月、10月、1月の毎週火曜日の朝30分間を基礎学力向上のための時間として設定」したり、F中では漢字、英単語、計算力、理科、社会にわたって「学力コンテスト」を実施したりして、学習内容の定着を図っているとみられる（いずれも自由記述の回答より）。

(7) G 中学校区

G 中学校区は、G 中学校と g 小学校の「1 小・1 中」の組み合わせである。G 中と g 小の間には約800mの距離がある。

児童・生徒の学力は「全国平均並み」（g小）、「全国平均をやや上回る」（G中）とするもの

の、「学力が低い児童・生徒が多い」や「学力が高い者と低い者との差が大きい」には「とてもよくあてはまる」(g小)、「ややあてはまる」(G中)と回答していることから、学力下位層が厚いのではないかと推測される。「小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」に2校とも「ややあてはまる」としていることから、小学校から中学校への移行期において学力を定着させる取り組みが必要とされているであろうことが推察される。

G中学校区は児童・生徒数および学級数が少なく、習熟度別指導や少人数指導・少人数学習はほとんど実施していない。しかし、「家庭学習の習慣を身につけさせる指導」には「とても積極的に」(g小)、「やや積極的に」(G中)取り組んでおり、「保護者と児童・生徒を対象に『家庭学習診断表』による家庭学習の状況調査を行い、中間報告等を通して啓発」を図る(G中、自由記述)など、家庭と協力しながら学習習慣の定着を図っているといえよう。

(8) H中学校区

H中学校区は、H中学校とh1小学校、h2小学校とからなる、「2小・1中」の組み合わせである。h1小学校・h2小学校間は約4.5kmの距離があり、H中学校は2つの小学校のほぼ中間に位置する(H中学校とh1小学校の間は約2.5km、H中学校とh2小学校の間は約3km)。

h2小の児童が「全国平均をやや上回る」学力水準としたのに対し、h1小およびH中の児童・生徒の学力水準は「全国平均をやや下回る」という。また、h2小は「全体として学力水準が低い」に「あまりあてはまらない」と回答したのに対し、h1小とH中は「ややあてはまる」と回答したことから、2つの小学校間の学力の差があることが窺える。「学習習慣が身につけていない児童・生徒が多い」ことや「小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」ことに、h1小とH中が「ややあてはまる」、h2小が「あまりあてはまらない」としたことからも、H中に入学者の段階ですでに学習の前提となる条件が異なっていることが課題となっているようである。H中では「学力不足のために、希望する高校への進学が難しい生徒が多い」に「ややあてはまる」としており、中学校3年間では十分に学力を引き上げることが難しいのかもしれない。

導入の理由や効果のほどは不明であるが、市内のほかの小学校では一部の学年しか、あるいはまったく取り入れていない小学校理科の教科担任制を、h1小・h2小とも3年生から導入していることは注目すべきであるだろう。

(9) I中学校区

I中学校区は、I中学校とi小学校の「1小・1中」の組み合わせであり、I中とi小は道路を挟んでほぼ隣接している。

児童・生徒の学力は、「全国平均をやや上回る」(i小)、「全国平均並み」(I中)とのことであるが、「学力が低い児童・生徒が多い」や「学力が高い者と低い者との差が大きい」については2校とも「ややあてはまる」としており、学力下位層が全体の平均を下げていることが予想される。「家庭学習に積極的に取り組む児童・生徒が多い」に両校とも「あまりあてはまらない」としており、家庭学習への取り組み方がキーになりそうである。

I中学校区は町の合併により、平成23年度より小中一貫教育に本格的に取り組む始めたばかりであるため、小中合同の「家庭学習の手引き」は現在作成中とのことである(自由記述より)

が、「家庭学習の習慣を身につけさせる指導」に「とても積極的に」(i小)、「やや積極的に」(I中) 取り組んでいる様子が窺える。

I中・i小とも児童・生徒数が少ないため、習熟度別指導や少人数指導・少人数学習はあまり実施されていないが、「放課後や休み時間等の補習指導」を「とても積極的に実施」(i小) していることや、「小学校卒業時に春休みの課題を4教科課している」(I中) など、小規模であることを活かして児童・生徒に寄り添った指導を心がけているようである(自由記述より)。

V おわりに

本稿では、連携型小中一貫教育を全市で進めている宮崎県小林市において、児童・生徒の学力向上を目指してどのような取り組みが行われているのかを質問紙調査によって把握し、小・中学校の校種別および中学校区別に全体状況を概観した。その結果、次の3点が明らかになった。

- ①小林市全体で「知」、「徳」、「体」、「食」のバランスがとれた教育活動を推進している中でも、とりわけ「知」の側面、すなわち学力向上に重点的に取り組んでいる。
- ②とはいうものの、小学校と中学校とでは児童・生徒の学力や学習に関する認識に差があり、それを踏まえて重視する教育目標や積極的に取り組む教育活動にも校種別の違いがある。
- ③児童・生徒の学力や学習に関する課題は中学校区ごとにも異なり、それらに対して取られている方策においても違いが見られる。

これらのことから、小中一貫教育を進める上で次のような示唆が得られる。

小・中学校間に見られるさまざまな「差異」—重点を置く教育目標とそれに対する課題、教職員の特性や指導の方法、保護者の学校に対する意識など—があり、それらは小中一貫教育の取り組みを困難にさせる要因にもなり得るが、解消することは容易ではない。したがって、その「差異」の存在を小・中学校が互いに意識しながら、中学校区としての目標に向けて教育活動の調整を図る必要があるだろう。

また当然のことながら、学力・学習に関して中学校区として抱える課題や目標が異なれば、それに向けて取り組む教育活動も中学校区ごとに異なるはずである。複数の中学校区を有する自治体が小中一貫教育を推進しようとする場合、取り組みを一律に導入・展開することは、中学校区間に教育環境の差が生じないような配慮という意味で、学校設置者としてのひとつの責任の持ち方である。そのうえで、中学校区の特徴や目標という実態に応じた取り組みができるように、裁量の余地を残しながら進めることが望ましいだろう。

以上のような知見が得られたものの、これらの結果を他の自治体や学校へ一般化することは、今回の調査対象校の数が少ないため適切ではない。また、質問紙調査では文字による限られた回答からしか取り組みの状況を把握できないことや、各種の取り組みを始めることとなった背景や学力との因果関係までは理解し得ないことなど、研究上の諸々の制約・限界があることは否めない。とはいえ、市全体での小中一貫教育の取り組みの状況について概観する、という目的はひとまず達成されたといえよう。次の研究上のステップとして、学校に訪問し、教職員へのインタビューを行ったり授業を参観したりするなどして、より踏み込んだ調査と分析が求められるだろう。

注

- (1) 「小林市小中一貫教育基本計画」 小林市教育委員会 平成20（2008）年11月 p.4.
- (2) 助川晃洋 「宮崎県小林市西小林中学校区の小中一貫教育における学力向上の取り組み－『研究紀要』に示された『知育班の取組』に着目して－」 『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第26号 宮崎大学教育文化学部 平成24（2012）年3月 pp.1-12.
- (3) 小学校と中学校との回答の差に関する解釈をする際には、慎重を期す必要がある。というのは、「中学校区の児童・生徒全体の状況」について回答するよう注意を促してはいるものの、回答者（学校）側では必ずしもそのように捉えず、「自校の児童または生徒の状況」について回答しているおそれがあるためである。
- (4) 佐賀市教育委員会（佐賀県）は、小中連携・一貫教育を推進するに当たり、「ステップ0（普通一般期）」から「ステップ5（一貫教育期）」までの6つのステップを提案している（http://www.city.saga.lg.jp/up_download_file/s18156_20090318014554.pdf、平成24年9月10日接続確認）。小中連携を準備・開始する「ステップ1・2」の時期には「相互授業参観」や「年数回の合同研修」が置かれている。
- (5) このことは、実際に教員一人ひとりが感じる困難さ（時間の調整のしにくさ）とイコールではない。この調査は、学校としての回答を求めているため、小中合同の会議等を学校あるいは中学校区全体として設定すると、教員個人の「時間が確保できない」という困難は物理的に減少するものと思われる。

資料1 調査票および単純集計結果（校種別）

単純集計結果（校種別）（単位：％）

小中一貫教育実践校における学力向上の取り組みに関する調査

この調査は、小中一貫教育を実践している小・中学校ならびに中学校区単位で、児童・生徒の学力向上を目指してどのような取り組みを行っているかを明らかにするために、小林市教育委員会のご理解・ご協力を得て、宮崎大学小中一貫教育支援研究プロジェクトが実施するものです。調査は、小林市の市立小学校および市立中学校のすべてを対象としております。校務でご多忙のところにご面倒をおかけすることとなり大変恐縮ですが、調査の趣旨をご理解の上、ご協力をいただければ幸いです。

＜お答えいただく上での注意＞

- 質問には、校長先生、教頭先生、教務主任の先生など、**学校の運営や小中一貫教育に深く携わっておられる先生**がご回答ください。先生方の中で相談してご記入いただいてもかまいません。なお、ご回答くださる先生のお名前をご記入いただく必要はありませんが、後日、回答についての確認や連絡をとる必要が生じたときのために、お立場（役職名）のみお知らせください。
- 一部、昨年度までの指導実施状況や卒業生を想定してお答えいただく質問がありますが、基本的には今年度（平成 24 年度）の児童・生徒の状況や学校の方針等についてご回答ください。また、回答にあたって、中学校区で相談する時間をとったり、回答を統一したりする必要はございません。質問によっては、意見や考えをうかがうものもありますが、記入される方の主観的な判断でお答えくださって結構です。
- ご記入いただいた調査票は、同封の返信用レターバックに入れ**7月13日（金）**までにご投函をお願いいたします。その際、学校要覧や学校経営案など、貴校の概要や教育実践について記した資料、貴校の記録等で頂戴できるものがありましたら、同封していただけますと幸いです。なお、パソコンを利用して全部あるいは一部を記入していただくことも可能です。その場合、お手数ですが、下記の担当者までメールでお知らせください。
- 調査の結果は、学会や小中一貫教育フォーラムで発表する際に報告したり、論文や報告書等に掲載したりすることを予定しておりますが、研究以外に用いることは決してありません。調査の実施・公表にあたっては、どの学校がどのような回答をしたのか特定できないよう配慮し、情報の保護に万全の注意を払います。この調査に回答していただくことによって、貴校や先生方にご迷惑をおかけすることはありませんので、ご安心ください。
- 本調査についてのお問い合わせは、下記の担当者までお願いいたします。

助川 晃洋（宮崎大学教育文化学部 准教授）

TEL/FAX ●●●●●●●●●● E-mail : ●●●●●●●●@cc.miyazaki-u.ac.jp

＜学校名と、貴校が属する中学校区をご記入ください＞

貴校の名称	小学校	12校	貴校が属する中学校区
	中学校	9校	9 中学校区

＜調査票にご記入くださる先生の役職名をお答えください＞ N=21（複数回答あり）

- | | | | | | |
|-------------|-----|--------|------|---------|------|
| 1. 校長 | 4.8 | 2. 教頭 | 28.6 | 3. 教務主任 | 66.6 |
| 4. 小中一貫教育担当 | 4.8 | 5. その他 | 0.0 | | |

◆ 以下、特に表記がない場合は、小学校：N=12、中学校：N=9

Q 1. 貴校に在籍する児童・生徒についてお尋ねします。貴校の児童・生徒の学力の状況は、全体として見るとどのような状態にありますか。次の選択肢の中から、おおむね最も近いと考えられるものをひとつ選び、番号に○をつけてください。

- | | | |
|-----------------|--------|--------|
| 1. 全国平均を、大幅に上回る | 小：0.0 | 中：0.0 |
| 2. 全国平均を、やや上回る | 小：41.7 | 中：55.6 |
| 3. 全国平均並み | 小：25.0 | 中：11.1 |
| 4. 全国平均を、やや下回る | 小：33.3 | 中：33.3 |
| 5. 全国平均を、大幅に下回る | 小：0.0 | 中：0.0 |

Q 2. 貴校が属する**中学校区の児童・生徒全体の状況**についてお尋ねします。中学校区の児童・生徒の学習・学力はどのような実態ですか。以下にあげる事項について、中学校区の児童・生徒にあてはまるものをひとつずつ選び、その番号に○をつけてください。

	とてもよく あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない	わからない
A. 学力が高い児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	33.3 11.1	58.3 88.9	8.3 0.0	0.0 0.0
B. 学力が低い児童・生徒が多い	小：16.7 中：11.1	33.3 77.8	50.0 11.1	0.0 0.0	0.0 0.0
C. 学力が高い者と学力が低い者との差が大きい	小：41.7 中：22.2	50.0 77.8	8.3 0.0	0.0 0.0	0.0 0.0
D. 全体として学力水準が低い	小：16.7 中：0.0	25.0 44.4	58.3 55.6	0.0 0.0	0.0 0.0
E. 授業に集中できない児童・生徒が多い	小：8.3 中：0.0	50.0 33.3	41.7 66.7	0.0 0.0	0.0 0.0
F. 学習意欲が高い児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	58.3 44.4	41.7 55.6	0.0 0.0	0.0 0.0
G. 学習習慣が身につけていない児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	58.3 55.6	41.7 44.4	0.0 0.0	0.0 0.0
H. 家庭学習に積極的に取り組む児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	58.3 22.2	41.7 77.8	0.0 0.0	0.0 0.0
I. 小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	41.7 66.7	58.3 33.3	0.0 0.0	0.0 0.0
J. 学力不足のために、希望する高校への進学が難しい生徒が多い（ 中学校区 の生徒についてお答えください）	小：0.0 中：0.0	16.7 22.2	58.3 66.7	0.0 11.1	16.7 0.0
K. 中学校区内の複数の小学校間で、学力水準に差がある（中学校区に属する小学校が1校のみの場合、回答不要） ※ 小：N=6、中：N=3	小：0.0 中：0.0	33.3 66.7	66.7 0.0	0.0 33.3	0.0 0.0

無回答
8.3
0.0

Q 3. 貴校が教育活動を行う上で重点を置いていることには、どのようなことがありますか。次のうち、学校として特に重点を置いていることを3つまで選び、番号に○をつけてください。(複数回答)

	小	中
1. すべての児童・生徒に、基礎学力を身につけさせること	91.7	77.8
2. 学校全体としての学力水準を上げること	16.7	44.4
3. 学習習慣を身につけさせ、主体的に学習に取り組む児童・生徒を育むこと	33.3	33.3
4. 基本的な生活習慣を身につけさせること	50.0	22.2
5. 自分に自信や誇りを持てる児童・生徒を育成すること	16.7	66.7
6. 児童・生徒が望ましい人間関係を築くことができるようすること	8.3	11.1
7. 郷土を愛し、地域に誇りが持てる児童・生徒を育むこと	33.3	33.3
8. すべての児童・生徒に、体力テストで一定水準の体力をつけさせること	8.3	0.0
9. 正しい食習慣を確立させ、健全な身体を育むこと	33.3	0.0
10. 生徒指導上の問題がない、落ち着いた学校生活を送らせること	8.3	11.1

Q 4. 貴校において、「知育」、「徳育」、「体育」のうち、最も課題としていることはどれですか。いづれかひとつの番号に○をつけてください。

1. 知育	小：100.0	中：100.0
2. 徳育	小：0.0	中：0.0
3. 体育（食育を含む）	小：0.0	中：0.0

Q 5. 貴校では、子どもの学力向上に向けて次のような取り組みをどれくらい積極的に実施していますか。それぞれについてあてはまる番号ひとつずつに、○をつけてください。

	とても実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	実施していない
A. 放課後や休み時間等の補習指導	小：25.0 中：33.3	33.3 55.6	33.3 11.1	8.3 0.0
B. 長期休業中の補習指導	小：8.3 中：33.3	8.3 66.7	41.7 0.0	41.7 0.0
C. 習熟度別指導	小：33.3 中：22.2	25.0 11.1	16.7 55.6	25.0 11.1
D. 少人数指導・少人数学習	小：66.7 中：33.3	0.0 22.2	16.7 11.1	16.7 33.3
E. 学力が高い児童・生徒に対して、発展的な学習の機会を用意すること	小：0.0 中：0.0	50.0 55.6	41.7 44.4	8.3 0.0
F. 自校の教員を活用したT Tによる授業	小：16.7 中：0.0	25.0 0.0	41.7 77.8	16.7 22.2
G. ICTを活用した授業を行うこと	小：41.7 中：11.1	41.7 55.6	16.7 33.3	0.0 0.0
H. 家庭学習の習慣を身につけさせる指導	小：41.7 中：11.1	58.3 66.7	0.0 22.2	0.0 0.0

ほかに、貴校が学力向上を目指して行っている取り組みがありましたら、具体的にお教えてください。

※ 省略（資料3参照）

小学校にお尋ねします。 (中学校は4ページのQ9にお進みください。) (N=12)

◆ このページのQ6～Q8につきましては、実施計画などの関連資料を添付することにより、回答に代えていただくことも可能です。

Q6. 今年度、貴校では教科担任制を取り入れている学年・教科等がありますか。下の表のうち、教科担任制を取り入れている学年および教科等のマスに○をご記入ください。

	国語	社会	算数	理科	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語活動
1年生	0.0		0.0		16.7	0.0		0.0	
2年生	8.3		0.0		33.3	0.0		0.0	
3年生	0.0	0.0	0.0	16.7	58.3	0.0		0.0	
4年生	8.3	0.0	0.0	25.0	58.3	8.3		0.0	
5年生	8.3	0.0	0.0	50.0	66.7	8.3	16.7	0.0	0.0
6年生	0.0	0.0	0.0	50.0	66.7	16.7	33.3	16.7	16.7

Q7. 貴校では、習熟度別授業を取り入れていますか。あてはまるほう番号に○をつけてください。

- 取り入れている(「今年度、取り入れる予定」も含む) 58.3 →下のSQ7にお答えください。
- 取り入っていない →Q8へお進みください。 41.7 ↓

SQ7. 上の質問で「1. 取り入れている」と回答した小学校にお尋ねします。下の表のうち、習熟度別授業を取り入れている学年および教科のマスに○をご記入ください。(N=7)

	国語	社会	算数	理科	その他の教科
1年生	0.0		0.0		0.0
2年生	0.0		0.0		0.0
3年生	14.3	0.0	85.7	0.0	0.0
4年生	0.0	0.0	85.7	0.0	0.0
5年生	0.0	0.0	85.7	0.0	0.0
6年生	0.0	0.0	85.7	0.0	0.0

Q8. 今年度、通常の授業において、貴校の教員が中学生に対して授業を行う機会がありますか(単独かTTかを問いません)。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

- ある(今年度、行う予定)も含む 25.0 →下のSQ8にお答えください。
- ない →5ページのQ11へお進みください。 75.0 ↓

SQ8. 上の質問で「1. ある」と回答した小学校にお尋ねします。下の表のうち、貴校の教員が中学生に対して授業を行う教科と学年および頻度をお教えてください(頻度は、実施している学年・教科のマスに、「週1時間」「学期に1回」などご記入ください)。(N=3、頻度略)

	国語	社会	数学	理科	英語	その他の教科(教科等名)
中学1年生	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	66.7 (家庭、音楽、特別支援学級への支援)
中学2年生	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3 (家庭、音楽)
中学3年生	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	66.7 (家庭、音楽、特別支援学級への支援)

中学校にお尋ねします。 (小学校は、5ページのQ11にお進みください。) (N=9)

◆ このページのQ9～Q10につきましては、実施計画などの関連資料を添付することにより、回答に代えていただくことも可能です。

Q9. 貴校では、習熟度別授業を取り入れていますか。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

1. 取り入れている (「今年度、取り入れる予定」も含む) 44.4 →下のSQ9にお答えください。
 2. 取り入っていない →Q10へお進みください。 55.6 ↓

SQ9. 上の質問で「1. 取り入れている」と回答した中学校にお尋ねします。下の表のうち、習熟度別授業を取り入れている学年および教科のマスに○をご記入ください。 (N=4)

	国語	社会	数学	理科	英語	その他の教科
中学1年生	0.0	0.0	100.0	0.0	75.0	0.0
中学2年生	0.0	0.0	100.0	0.0	75.0	0.0
中学3年生	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0

Q10. 今年度、通常の授業において、貴校の教員が小学生に対して授業を行う機会がありますか (単独かT Tかを問いません)。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

1. ある (今年度、行う予定)も含む 100.0 →下のSQ10にお答えください。
 2. ない →5ページのQ11へお進みください。 0.0 ↓

SQ10. 上の質問で「1. ある」と回答した中学校にお尋ねします。下の表のうち、貴校の教員が小学生に対して授業を行う教科等と学年および頻度をお教えてください (頻度は、実施している学年・教科等のマスに、「週1時間」「学期に1回」などご記入ください)。 (N=9、頻度略)

	国語	社会	算数	理科	その他の教科等 (教科等名)
1年生	0.0	/	0.0	/	11.1 (音楽)
2年生	0.0	/	0.0	/	11.1 (音楽)
3年生	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1 (音楽)
4年生	0.0	0.0	0.0	11.1	22.2 (音楽)
5年生	22.2	0.0	22.2	0.0	55.6 (音楽、外国語活動、体育、家庭)
6年生	33.3	33.3	66.7	44.4	100.0 (音楽、外国語活動、技術、体育)

すべての小学校・中学校にお尋ねします。

Q11. 貴校および中学校区では、児童・生徒の学習支援や学力向上に向けて、小・中学校が連携して次のようなことを実施していますか。実施しているものすべての番号に○をつけてください。

	小	中
1. 小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること	100.0	100.0
2. 他校種（小学校⇔中学校）の教員がTTとして、授業に入ること	58.3	55.6
3. 他校種（小学校⇔中学校）の教員が単独で、授業を行うこと	83.3	88.9
4. 通常の授業以外（サマースクールなど）で他校種（小学校⇔中学校）の教員が授業を行うこと（TT、単独を問わず）	33.3	66.7
5. 中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと	91.7	100.0
6. 中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析を行うこと	100.0	88.9
7. 学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること	33.3	44.4
8. 小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること	58.3	44.4
9. 小・中学校合同で、評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること	33.3	11.1
10. 中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること	41.7	22.2
11. 授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	100.0	77.8
12. 校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	58.3	66.7
13. 家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること	91.7	88.9
14. 中学校区で共通の「家庭学習の手引き」を作成するなどして、家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること	91.7	44.4
15. 学習や生活に関する家庭向けの通信（おたより）を、中学校区として発行すること	41.7	55.6

※ 次の16～18は、小学校のみお答えください。（N=12）

16. 中学校区の小学校どうして交流学习を行うこと（小・小連携）(N=6)	100.0	-
17. 中学校進学前の児童に、中学校の学習に必要な基礎的・基本的な事項を確認させること	50.0	-
18. 卒業させた児童について、中学校と連絡を取り合って学習をサポートすること	41.7	-

※ 次の19～22は、中学校のみお答えください。（N=9）

19. 中学校進学前に学力面で身につけておいてほしいことを、小学校へ伝えること	-	77.8
20. 学力面で気になる生徒について、生徒の出身小学校と連絡を取り合うこと	-	88.9
21. 小学校の保護者に対し、中学校での学習や生活について中学校の教員が説明をすること	-	88.9
22. 長期休業中などに、中学生が小学生の学習をサポートする活動を行うこと	-	0.0

上記の回答への補足や、そのほかに貴校および中学校区が連携して学力向上を目指している取り組みがありましたら、具体的にお教えてください。

※ 省略（資料3参照）

Q12. 貴校および中学校区では、小学校から中学校への「進学」に際し、学習状況や学力実態に関してもどのような引き継ぎを行っていますか。その内容や様式について、具体的にお教えてください。

※ 省略（資料3参照）

- Q13. 中学校区の児童・生徒の学習や学力について、小・中学校の教職員の間では日常的にどのような機会に、どのような情報交換がなされていますか。情報交換の機会やその頻度、情報の内容などについて、具体的にお教えてください。

※ 省略（資料3参照）

- Q14. 貴校では、新学習指導要領を踏まえて「確かな学力」を育成するために、小中一貫教育を通してどのような取り組みを行っていますか。貴校での取り組みについて、以下に具体的にご記入ください。

<基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために>

例) 中学校入学後に、小学校で学習した内容を復習する機会を設けている。

※ 省略（資料3参照）

<思考力・判断力・表現力等を育成するために>

例) 9年間のスパンで論述やレポートに力を入れた指導をしている。

※ 省略（資料3参照）

<学習意欲を向上させるために>

例) 小学校において、中学校等で学習する内容を先取りした授業を行い、学習への意欲を高めている。

※ 省略（資料3参照）

<学習習慣を身につけさせるために>

例) 望ましい家庭学習の時間や内容について、9年間分の表を作り、家庭に配付している。

※ 省略（資料3参照）

Q15. 貴校では、小中一貫教育の仕組みを活かして学力向上に取り組む際、次のようなことをどれくらい感じていますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	かなり 感じている	少し 感じている	あまり 感じていない	ほとんど 感じていない
A. 小・中学校間で、連絡を取り合ったり情報を共有したりする機会が少ないこと	小：0.0 中：11.1	25.0 77.8	58.3 11.1	16.7 0.0
B. 小学校と中学校との距離が離れていて、行き来にかかること	小：25.0 中：22.2	8.3 11.1	41.7 33.3	25.0 33.3
C. 小・中学校の教員が集まって話し合う時間が確保しにくいこと	小：16.7 中：11.1	41.7 55.6	41.7 33.3	0.0 0.0
D. 他校種の授業を参観したり、乗り入れ授業を行ったりするための時間が確保できないこと	小：16.7 中：11.1	33.3 55.6	33.3 33.3	16.7 0.0
E. 他校種（小学校⇔中学校）への乗り入れ授業をすることができる教員の人数が不足していること	小：25.0 中：33.3	50.0 44.4	25.0 11.1	0.0 11.1
F. 他校種（小学校⇔中学校）への乗り入れ授業を行うための、教員の知識・技術や専門性が不足していること	小：8.3 中：0.0	33.3 22.2	58.3 44.4	0.0 33.3
G. 他校種（小学校⇔中学校）の児童・生徒理解が難しいこと	小：0.0 中：0.0	25.0 22.2	58.3 55.6	16.7 22.2
H. 小・中学校間で、指導方法や学習の進め方などが異なること	小：8.3 中：0.0	58.3 55.6	33.3 44.4	0.0 0.0
I. 小・中学校間で、評価の考え方や方法が異なること	小：0.0 中：11.1	50.0 55.6	50.0 33.3	0.0 0.0
J. 小・中学校の教員が持つ、それぞれの指導観や子ども観を理解するのに時間がかかること	小：8.3 中：0.0	33.3 55.6	58.3 33.3	0.0 11.1
K. 異動があるため、児童・生徒を長期にわたって指導することができないこと	小：8.3 中：11.1	16.7 33.3	58.3 44.4	16.7 11.1
L. 小中一貫教育に関心がなかったり、理解がなかったりする教職員がいること	小：8.3 中：0.0	25.0 33.3	33.3 44.4	33.3 22.2

その他、貴校および貴校が属する中学校区において、小中一貫教育を行う上で困難に感じることや課題がありましたら、ご記入ください。また、それを解決するために貴校や中学校区でとっている手段や工夫がありましたら、併せてご記入ください。

※ 省略（資料3参照）

Q16. 貴校の児童・生徒の状況についてお尋ねします。貴校には次のような児童・生徒はどれくらいいますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	かなり多い	やや多い	あまり多くない	ほとんどいない
A. 当該学年の学習についていけない児童・生徒	小：8.3 中：0.0	41.7 44.4	50.0 55.6	0.0 0.0
B. 授業中落ち着きのない児童・生徒	小：8.3 中：0.0	33.3 0.0	50.0 88.9	8.3 11.1
C. 不登校の児童・生徒	小：0.0 中：0.0	0.0 11.1	8.3 22.2	91.7 66.7
D. 経済的に困難を抱えている家庭の児童・生徒	小：16.7 中：0.0	41.7 55.6	33.3 44.4	8.3 0.0
* 次のE・Fは、小学校のみお答えください (N=12)				
E. 中学校進学時に、学習に対する不安が見られる児童	小：0.0 中：-	33.3 -	66.7 -	0.0 -
F. 国・私立中学校を受験する児童	小：0.0 中：-	0.0 -	66.7 -	33.3 -
* 次のG・Hは、中学校のみお答えください (N=9)				
G. 小学校までの学習内容を習得していない生徒	小：- 中：0.0	- 66.7	- 33.3	- 0.0
H. 学力不足により、希望する進路に進めない生徒	小：- 中：0.0	- 22.2	- 66.7	- 11.1

Q17. 貴校の児童・生徒の保護者や地域の状況についてお尋ねします。貴校には次のような保護者や地域住民はどれくらいいると思われますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	かなり多いと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	ほとんどいないと思う
A. 教育熱心な保護者	小：16.7 中：11.1	41.7 44.4	41.7 44.4	0.0 0.0
B. 学校の教育活動や行事等に協力する保護者	小：58.3 中：44.4	33.3 44.4	8.3 11.1	0.0 0.0
C. 児童・生徒の家庭学習に協力する保護者	小：16.7 中：11.1	58.3 22.2	25.0 66.7	0.0 0.0
D. 授業参観や学級懇談に出席する保護者	小：25.0 中：0.0	58.3 66.7	16.7 33.3	0.0 0.0
E. 小中一貫教育に対して理解のある保護者	小：33.3 中：0.0	50.0 66.7	8.3 33.3	8.3 0.0
F. 学校の教育活動や行事等に協力する地域住民	小：33.3 中：33.3	50.0 33.3	16.7 33.3	0.0 0.0
G. 学校公開（オープンスクール）に参加する地域住民	小：16.7 中：0.0	33.3 22.2	41.7 77.8	8.3 0.0
H. 小中一貫教育に対して理解のある地域住民	小：25.0 中：0.0	58.3 55.6	8.3 44.4	8.3 0.0

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における
学力向上の取り組み－質問紙調査による全体状況の把握－

資料2 回答一覧

中学校区	学校名	児童・生徒数	学級数計 (特別支援学級、内数)	教職員数計 (正規職員、内数)	回答者	Q1 自校の児童・生徒の学力	Q2 中学校区の児童・生徒全体の学習・学力の状況										
							A. 学力が高い児童・生徒が多い	B. 学力が低い児童・生徒が多い	C. 学力が高い者が低い者が大きい	D. 全体学力水準が低い	E. 授業に集中できない児童・生徒が多い	F. 学習意欲が高い児童・生徒が多い	G. 学習習慣が身に付いていない児童・生徒が多い	H. 家庭に積極的に取り組む児童・生徒が多い	I. 小学校卒業までに習得が必要内容を十分理解していない児童・生徒が多い	J. 学力不足のために、希望する進路への進学が難しい児童・生徒が多い	K. 中学校区内の小学校間で、学力水準に差がある
A	A中	474	15(2)	35(31)	教頭	全国平均をやや上回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
	a1小	658	22(2)	43(34)	教頭	全国平均をやや上回る	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない
	a2小	328	14(2)	22(17)	教務主任	全国平均をやや上回る	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	わからぬ	ややあてはまる	
B	B中	142	7(1)	18(15)	教務主任	全国平均をやや下回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	
	b小	279	13(2)	23(19)	教務主任	全国平均並み	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	とてもよくあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	
C	C中	137	8(2)	20(15)	教務主任	全国平均をやや上回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる
	c1小	175	7(1)	15(12)	教務主任	全国平均をやや上回る	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	わからぬ	あまりあてはまらない	
	c2小	16	3(0)	6(5)	教務主任	全国平均をやや下回る	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	わからぬ	あまりあてはまらない	
D	D中	35	3(0)	12(9)	教務主任、小中一貫担当	全国平均をやや上回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	
	d小	78	7(1)	14(11)	教務主任	全国平均をやや下回る	あまりあてはまらない	とてもよくあてはまる	とてもよくあてはまる	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	N.A.		
E	E中	59	4(1)	12(11)	教務主任	全国平均をやや下回る	あまりあてはまらない	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	
	e小	101	7(1)	12(10)	校長	全国平均をやや下回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもよくあてはまる	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	
F	F中	228	9(2)	20(16)	教頭	全国平均をやや上回る	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
	f小	446	17(2)	28(24)	教頭	全国平均並み	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	
G	G中	52	4(1)	16(11)	教務主任	全国平均をやや上回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない		
	g小	64	7(1)	12(10)	教務主任	全国平均並み	まったくあてはまらない	とてもよくあてはまる	とてもよくあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない		
H	H中	165	8(2)	21(18)	教頭	全国平均をやや下回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	
	h1小	219	10(2)	21(16)	教務主任	全国平均をやや下回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	
	h2小	132	8(2)	15(13)	教務主任	全国平均をやや上回る	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる		
I	I中	34	3(0)	16(10)	教務主任	全国平均並み	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない		
	i小	67	6(0)	13(10)	教頭	全国平均をやや上回る	あまりあてはまらない	ややあてはまる	ややあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない	あまりあてはまらない		

中学校区	学校名	Q3 教育活動を行う上で重点を置いていること（3つまで）										Q4 知徳体で最も課題としていること
		1. すべての児童・生徒に、基礎学力を身につけさせること	2. 学校全体としての学力水準を上げること	3. 学習習慣を身につけさせ、主体的に学習に取り組む児童・生徒を育むこと	4. 基本的な生活習慣を身につけさせること	5. 自分や誇りを生かして児童・生徒を育成すること	6. 児童・生徒が望ましい人間関係を築くことができるようにすること	7. 郷土を愛し、地域に誇りが持てる児童・生徒を育むこと	8. すべての児童・生徒に、体力テストで一定水準の体力をつけさせること	9. 正しい食習慣を確立させ、健全な身体を育むこと	10. 生徒指導上の問題がない、落ち着いた学校生活を運らせること	
A	A中		○	○		○						知育
	a 1小	○		○	○							知育
	a 2小	○			○				○			知育
B	B中	○	○		○							知育
	b小	○				○			○			知育
C	C中	○				○			○			知育
	c 1小	○			○						○	知育
	c 2小	○	○	○								知育
D	D中	○	○	○								知育
	d小	○		○					○			知育
E	E中	○							○		○	知育
	e小	○		○					○			知育
F	F中	○		○		○						知育
	f小	○			○					○		知育
G	G中		○			○			○			知育
	g小	○			○					○		知育
H	H中	○				○	○					知育
	h 1小	○						○	○			知育
	h 2小		○			○				○		知育
I	i 中	○			○	○						知育
	i 小	○			○					○		知育

宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における
学力向上の取り組み－質問紙調査による全体状況の把握－

中学校区	学校名	Q5 学力向上に向けた取り組み								
		A. 放課後や休み時間等の補習指導	B. 長期休業中の補習指導	C. 習熟度別指導	D. 少人数指導・少人数学習	E. 学力が高い児童・生徒に対して、発展的な学習の機会を用意すること	F. 自校の教員を活用したTTTによる授業	G. ICTを活用した授業を行うこと	H. 家庭学習の習慣を身につけさせる指導	その他の取り組み（自由記述、資料3）
A	A中	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	実施していない	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	自由記述あり
	a 1小	やや積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	
	a 2小	とても積極的に実施している	実施していない	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	実施していない	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	自由記述あり
B	B中	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	自由記述あり
	b小	やや積極的に実施している	あまり実施していない	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	自由記述あり
C	C中	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	自由記述あり
	c 1小	あまり実施していない	あまり実施していない	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	自由記述あり
	c 2小	やや積極的に実施している	実施していない	あまり実施していない	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	実施していない	あまり実施していない	やや積極的に実施している	
D	D中	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	実施していない	実施していない	やや積極的に実施している	実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	
	d小	あまり実施していない	あまり実施していない	実施していない	実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	
E	E中	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	
	e小	とても積極的に実施している	実施していない	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	あまり実施していない	あまり実施していない	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	自由記述あり
F	F中	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	自由記述あり
	f小	実施していない	やや積極的に実施している	実施していない	とても積極的に実施している	あまり実施していない	あまり実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	自由記述あり
G	G中	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	あまり実施していない	実施していない	やや積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	自由記述あり
	g小	あまり実施していない	実施していない	実施していない	実施していない	とても積極的に実施している	あまり実施していない	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	自由記述あり
H	H中	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	あまり実施していない	あまり実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	自由記述あり
	h 1小	やや積極的に実施している	実施していない	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	自由記述あり
	h 2小	あまり実施していない	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	あまり実施していない	やや積極的に実施している	やや積極的に実施している	とても積極的に実施している	やや積極的に実施している	自由記述あり
I	I中	あまり実施していない	やや積極的に実施している	あまり実施していない	実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	やや積極的に実施している	
	i小	とても積極的に実施している	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	あまり実施していない	とても積極的に実施している	とても積極的に実施している	

宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における
学力向上の取り組み－質問紙調査による全体状況の把握－

		Q11 児童・生徒の学習支援や学力向上に向けて、小・中連携して実施していること①											
中学校区	中学校名	1. 小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること	2. 他校種の教員がＴＴとして授業に入ること	3. 他校種の教員が単独で授業を行うこと	4. 通常の授業以外に他校種の教員が授業を行うこと	5. 中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと	6. 中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力について分析を行うこと	7. 学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること	8. 小・中学校合同で、系統性・一貫性の観点からカリキュラムを検討すること	9. 小・中学校合同で、詳細な校種や方法について一貫性の観点から検討すること	10. 中学校区で、小・中学校間の校種種の調整を図ること	11. 授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	12. 校則や学校の生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること
		A	A中	○		○	○	○	○	○	○		
a 1小	○		○	○		○	○		○			○	○
a 2小	○			○		○	○					○	○
B	B中	○	○	○	○	○	○						○
	b小	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
C	C中	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
	c 1小	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	c 2小	○		○		○	○				○	○	○
D	D中	○	○			○	○				○	○	○
	d小	○	○		○	○	○		○			○	○
E	E中	○		○		○						○	
	e小	○		○		○	○	○	○	○		○	
F	F中	○		○	○	○	○	○	○			○	○
	f小	○	○	○	○	○	○					○	○
G	G中	○	○	○	○	○	○	○				○	○
	g小	○	○			○	○	○	○			○	○
H	H中	○	○	○		○	○	○	○			○	
	h 1小	○	○	○			○					○	○
	h 2小	○		○		○	○		○	○	○	○	○
I	I中	○		○	○	○	○						
	i小	○		○		○	○				○	○	

宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における
学力向上の取り組み－質問紙調査による全体状況の把握－

中学校区	学校名	Q15 小中一貫教育における難しさ												
		A. 小・中学校間で、連携研修を共有しにくいこと	B. 小学校との距離が離れていて、行き来にかかる時間がかかること	C. 小・中学校の教員が兼任していること	D. 他校種の授業を参観したり、乗り入れ授業を行うための時間確保が難しいこと	E. 他校種への乗り入れ授業をすることができる教員の人数が不足していること	F. 他校種への乗り入れ授業を行うための教員の知識・技術や専門性が不足していること	G. 他校種の児童・生徒理解が難しいこと	H. 小・中学校間で、指導方法や学習の進め方などが異なること	I. 小・中学校の考え方や方法が異なること	J. 小・中学校の教員が異なるため、児童・生徒にわたって指導することができないこと	K. 異動があるため、児童・生徒にわたって指導することができないこと	L. 小中一貫教育に関心がなかったり、理解がなかったりする教員がいること	その他の課題（自由記述・資料3）
A中	a 1小	少し感じている	かなり感じている	少し感じている	少し感じている	かなり感じている	ほとんど感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	
		あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	かなり感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	
a 2小	B中	ほとんど感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	ほとんど感じている	自由記述あり
		ほとんど感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	ほとんど感じている	
b 小	c 1小	かなり感じている	あまり感じている	かなり感じている	かなり感じている	かなり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	
		少し感じている	かなり感じている	かなり感じている	かなり感じている	かなり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	
C中	c 2小	あまり感じている	かなり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	かなり感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	
		あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	かなり感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	
D中	d 小	少し感じている	ほとんど感じている	少し感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	ほとんど感じている	ほとんど感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	ほとんど感じている	ほとんど感じている	自由記述あり
		あまり感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	
E中	e 小	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	かなり感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	
		ほとんど感じている	あまり感じている	少し感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	ほとんど感じている	ほとんど感じている	自由記述あり
F中	f 小	少し感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	かなり感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	かなり感じている	少し感じている	
		あまり感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	自由記述あり
G中	g 小	少し感じている	ほとんど感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	
		少し感じている	かなり感じている	少し感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	
H中	h 1小	少し感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	
		あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	
h 2小	I中	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	
		あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	
I中	i 小	少し感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	少し感じている	あまり感じている	
		あまり感じている	ほとんど感じている	あまり感じている	少し感じている	少し感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	あまり感じている	ほとんど感じている	

中学校区	学校名	Q16 児童・生徒の状況										Q17 保護者や地域の状況									
		A. 当該学年の学習についていない児童・生徒	B. 授業中落ち着かない児童・生徒	C. 不登校の児童・生徒	D. 経済的に困難を抱えている家庭の児童・生徒	E. 中学校進学時に、学習に対する不安がみられる児童(小)	F. 国・私立中学校を受験する児童(小)	G. 小学校までの学習内容を習得していない生徒(中)	H. 学力不足により、希望する進路に進めない生徒(中)	A. 教育熱心な保護者	B. 学校の教育活動や行事等に協力する保護者	C. 児童生徒の家庭学習に協力する保護者	D. 授業参観や学級懇話会に出席する保護者	E. 小・中一貫教育に対して理解のある保護者	F. 学校の教育活動や行事等に協力する地域住民	G. 学校公開に参加する地域住民	H. 小・中一貫教育に対して理解のある地域住民				
A	A中	あまり多くない	あまり多くない	やや多い	やや多い			あまり多くない	あまり多くない	かなり多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う				
	a 1小	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	やや多い	あまり多くない	あまり多くない			やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う				
	a 2小	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	あまり多くない	やや多い	あまり多くない			やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う				
B	B中	やや多い	あまり多くない	あまり多くない	やや多い			やや多い	あまり多くない	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う				
	b 小	かなり多い	かなり多い	あまり多くない	かなり多い	あまり多くない	あまり多くない			あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う				
C	C中	あまり多くない	あまり多くない	あまり多くない	あまり多くない			やや多い	あまり多くない	やや多いと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う				
	c 1小	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	やや多い	あまり多くない	あまり多くない			あまり多くないと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う				
	c 2小	やや多い	やや多い	ほとんどいない	ほとんどいない	やや多い	あまり多くない			あまり多くないと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う	ほとんどいないと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	ほとんどいないと思う				
D	D中	やや多い	ほとんどいない	ほとんどいない	あまり多くない			やや多い	ほとんどいない	あまり多くないと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う				
	d 小	やや多い	やや多い	ほとんどいない	やや多い	あまり多くない	ほとんどいない			あまり多くないと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	ほとんどいないと思う	やや多いと思う				
E	E中	やや多い	あまり多くない	ほとんどいない	やや多い			やや多い	やや多い	やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う				
	e 小	やや多い	やや多い	ほとんどいない	やや多い	やや多い	ほとんどいない			かなり多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う				
F	F中	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	あまり多くない			やや多い	あまり多くない	やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う				
	f 小	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	あまり多くない	あまり多くない	あまり多くない			やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う				
G	G中	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	やや多い			あまり多くない	あまり多くない	やや多いと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う				
	g 小	やや多い	やや多い	ほとんどいない	かなり多い	やや多い	ほとんどいない			あまり多くないと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う	やや多いと思う				
H	H中	やや多い	あまり多くない	ほとんどいない	あまり多くない			やや多い	やや多い	あまり多くないと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う				
	h 1小	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	あまり多くない	あまり多くない	あまり多くない			やや多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	かなり多いと思う				
	h 2小	あまり多くない	ほとんどいない	ほとんどいない	やや多い	あまり多くない	あまり多くない			かなり多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う				
I	I中	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない	やや多い			あまり多くない	あまり多くない	やや多いと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	あまり多くないと思う	あまり多くないと思う				
	i 小	やや多い	あまり多くない	ほとんどいない	あまり多くない	あまり多くない	ほとんどいない			やや多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	やや多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う	かなり多いと思う				

宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における
 学力向上の取り組み－質問紙調査による全体状況の把握－

資料3 自由記述一覧

	Q5FA (学力向上を目指した取組)	Q7SQ「その他の教科」(小学校における習熟度別授業)	Q8 (小一・中乗り入れの教科・時間数)	Q9SQ「その他の教科」(中学校における習熟度別授業)	Q10 (小一・小乗り入れの教科・時間数)
A 中学校区	A中 学年主任を中心とする学年を主体とする学力向上対策と教科主任を中心とする教科毎の学力向上対策を講じている。また、小学校との合同研修により、教師の授業力向上を図っている。				6年国語、社会、算数、理科…年1回 5・6年家庭…週4時間
	a1小				
	a2小 授業力向上の視点で教職員同士で授業参観時間を年2回設け、授業の在り方を考える機会を設けている。 A中学校区の3校で学習指導の力を定めて取り組むことにした。その力点は、「導入・学習問題(工夫)」「基礎・基本の定着の半定着」「思考力・判断力・表現力の向上への半定着」である。				
B 中学校区	B中 基本的な内容の校内テスト(定期以外のもの)を実施している。				6年算数・理科・音楽
	b小 ・平成24年度より、市の小中一貫教育の研究指定を受け、学力向上をテーマに研究を進めている。 ・家庭学習の習慣化を図るために、参観日に「家庭学習の進め方説明会」を行った。 ・授業力向上モデル家庭が、授業で参考となる資料の配布やミニ研修会を行い、教師の授業力を高める取り組みを行っている。				
	C中 ・「無限の進歩の時間」…5教科で行っている基礎学力コンテスト。月～本まで、朝自習や放課後の時間をつかって勉強させて、金曜日のテストで確認させる。 ・「サマースクール、ウィンタースクール」…主に3年生を対象に、補充的な学習を行った。(過年度)				6年社会、理科…単元、領域を限定して実施予定 6年算数…週3時間 6年体育…週3時間 5年家庭…週2時間 6年音楽…週2時間 5・6年英語…年間5回程度予定
C 中学校区	c1小 ・午前5時制による取組 ・時数確保 ・午後の教材研究の時間確保		中1数学:週2時間		
	c2小				
	D中 D中				6年算数…週1時間 4年理科…週1時間 5・6年外国語…各週1時間
D 中学校区	d小				
	E中 E中				6年理科…週3時間 6年英語…年間半 6年技術…学期に1回
	e小 Gに関連してですが、小林市教委の研究指定を受け、ICT教育を研究しています。常時、電子教科書や大型デジタルテレビ、実物拡大機を活用して、学力向上に取り組んでいます。		中1～中3 家庭・音楽		
F 中学校区	F中 学力コンテスト(漢字・英単語・計算力・理科・社会)				6年生 音楽と外国語 週1時間
	f小 5月、10月、1月の毎週火曜日の朝30分を基礎学力向上のための時間として設定している。				
	G中 ・問題解決的な学習の充実(研究授業の充実) ・学力検定の実施 ・授業と連動した家庭学習の工夫				5・6年生…国語、算数:年1時間 5年生…外国語活動:年間35時間、体育:年9時間、音楽:年1時間 6年生…音楽、体育:年1時間、外国語活動:年3時間
G 中学校区	g小 スキルタイムの設定(朝の活動20分間、週2回)		中1・中3:特別支援学級への支援(T.T)各年間7回		
	H中 H中				5・6年生…算数:各0.5 4～6年生…音楽:各1.0
	h1小 ウェブ学習単元評価システムの活用				
H 中学校区	h2小 保護者との連絡のもと、家庭学習に関するアンケートを実施し、実態を把握するとともにPTAを中心とした家庭学習定着班による分析を手立てを提案している				
	I中 I中				5・6年生…国語:週1時間、外国語活動:2週に1時間 6年生…音楽:週1～2時間
	i小				

	Q11F A (小中連携した学習支援)	Q12 (中学進学時の引き継ぎ)	Q13 (日常的な情報交換)
A 中学校区	A中	入学前に6年生の担当と中学校の新入生担当が引き継ぎを実施し、特に配慮が必要な子どもの情報交換を行っている。また、夏季休業中にそれぞれ学校の学力の実態について情報交換を行っている。	本中学校区では、月に1回程度(夏季休業中は、別途教訓)の小中合同の研修会を実施している。本年度は、教科別の組織会で授業研究会を行っている。情報の内容としては、問題解決的な学習を中心とした指導法についてが中心である。
	a 1小	資料等を準備して、小学校の担任と、中学校の担当が直接話し合いを行っている。	・月1回の合同研修会 ・月に1回の全体会 ・不定規の研究主任会や校務分掌部会(原文ママ)
	a 2小	3月末に学習状況や生活態度、人間関係などについて情報交換を1時間半ぐらいかけて引き継ぎを行っている。 様式については、中学校からの提案形式に沿って対応している。	夏季休業中に中学校区で実施したNRT学力検査結果の分析を行い、全体会でその結果の傾向を報告する。 報告の過程で部会を3回全体会を1回開いた(平成23年度)
B 中学校区	B中	2時間程度の時間で6年生担任と新1年生担任が打ち合わせを行う。	月に1回、おおまかな内容で話し合っている。
	b小	・6学年担任が、卒業式後に中学校の研修会において職員全員へ引き継ぎを行っている。 ・小学校で行っている学力検査の結果について、中学校にも伝え分析を行っている。	・月1回の小中合同研修会で、各学校の児童の実態について各学年からの口頭での情報交換や各種検査についての研修会を行っている。
C 中学校区	C中	年度末に、中学校で、小学校学組・異教(それぞれ2校)に来てもらい、情報交換するとともに、中学校1年の学級編成について、アドバイスしてもらっている。	NRT(標準学力検査)の結果・分析結果を共有化することで、今後の指導の黒点化、充実を図る。
	c 1小	小学校6年担任が中学校職員と情報交換をする場を3月に設定している。	・月1回以上、小中一貫教育に関する研修会を設定し、実態分析や手だてについて協議を行っている。 また、授業参観日等を設定し、お互いの授業や児童生徒の学びの様子を自由に参観できる機会をつくっている。
	c 2小	3月下旬(春季休業中)に、学習面、生活面、体力・健康状態、家庭環境等についての連絡会を実施し、口頭で説明して引き継ぎを行っている。	
D 中学校区	D中	年度末に担当の教師として引き継ぎを行っている。内容は、学習、生活、身体健康、保護者についてである。	合同研修会(月1回程度に、標準学力調査などの対外的なテストや校内の定期テスト、日常の授業での様子についての情報交換を行っている)
	d小	中学校が小学校に来て、学習面、生活面、健康面から1時間程度引き継ぎを行っている。	月1回の合同研の時や、週に1回程度小学校に授業の時に話をする。主に授業内容や児童の様子などについて話をしている。
E 中学校区	E中	春休みに口頭で	学期1回程度
	e小	1校のみ(1小1中)の進学であり、日常的な引き継ぎがなされているが、3月末に引き継ぎ会を実施している。	ICT教育の研究指定を両校、受けているので合同研修会や研究授業等連携は良好である。
F 中学校区	F中	・指導要録の写しを中学校へ ・児童の状況を中学校へ(学習、リーダー性、気になる面、スポーツ、ピアノ等芸術面、保護者の状況) 年度末に小学校の担任と、中学校の職員(1年担任、養護教諭)へ引継ぎ会	NRTの分析、検討、今後の対応(小中合同研)特に夏季休業中に時間をとって
	f小	6年生全員が、年間で4日間朝から中学校へ参観し、中学校の校時やまきまりに従って生活する機会をつくっている。	年度末に、6学年担任と中学校新1年生担任、養護教諭が集まり、引継ぎ会を行っている。小学校担任がCRTテストの結果や児童の人間関係、家庭環境等の資料を準備している。
G 中学校区	G中	CRTや単元別テストを基にした学力実態、授業中の様子に基づいた学校での学習状況、家庭学習診断結果や課題の提出状況を基にした家庭での学習状況等を、生徒(児童)一人一人について引き継ぎしている。	小中合同研修会(年間13回程度)や小中合同担当者会(月1回)、小中合同の学校行事(小中合同運動会、小中合同水曜日、小中合同参観日、小中合同立会式)の際に、学力の実態や学校・家庭での学習状況について情報交換を行っている。
	g小	小中学校連絡会議(3月末)を行い、学担より学力検査等の結果や特に配慮の必要な児童についての伝達を行っている。	小中合同で研究主題及び副題を設定し、小中学校職員混合の班を編成し、研修を深めている(年間12回程度)
H 中学校区	H中	・合同研修会および合同授業研究会 ・6年生の担任と中学校職員との引継ぎ会	合同研究会等の実施(年10回程度)
	h 1小	中学校教諭と年度末に引き継ぎの時間を設定し、CRTをもとに学習達成度状況を伝えとともに、支援を要する児童に対しての指導のあり方を協議している。	月2回の合同研修会において、本中学校区児童生徒の学力の実態を加味した手立てを、知育部を中心に話し合い対策を行っている。
	h 2小	・年度当初に中学一年生の学習状況や実態把握を行うため、中学校で小・中連絡会を実施している ・年度末に小・中連絡会をもっている	情報交換会を年3回、合同研修会を年に23回設定している
I 中学校区	I中	小学6年生の学級担任と中学校副職員(学年職員、教務)と小学校作成の資料による引き継ぎを行っている。	小中合同研修会を17回行っている。うち半分以上が知育に関することで学力の分析や総合授業参観等を行い、児童・生徒の全体的な傾向や個別の情報交換を行っている。
	i小	年度末に小・中学校の担当者で引き継ぎを行っている。内容は①学力面②身体面③人間関係面④家庭環境面⑤部活動の指導要録等である。	小・中合同研修会において実施、年間17回、学力を分析する調査研究班が担う。学力分析はNRTテストの結果を扱う。

宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における
学力向上の取り組み－質問紙調査による全体状況の把握－

	Q14 <基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために>	Q14 <思考力・判断力・表現力等を育成するために>	Q14 <学習意欲を向上させるために>
A 中学校区	A中 各教科の導入の段階等で、小学校で学習した内容を想起させ授業を実施している。定着の悪い内容については、くり返しの学習や家庭での週末課題として補充している。	小中9年間をスパンとして、問題解決的な学習を中心として授業を進めている。特に、言語活動を中心として、自分の言葉でまとめる活動を重視している。	子どもたちの知的好奇心をありながら、課題を設定している。また、学習内容と日常生活との関連を図り意欲を高めている。
	a 1小 主題研究において、小中合同の教科部会を設けている。	言語活動の充実のための取組をしている。	実際に中学校で、中学校の先生による授業を受ける機会を設けている。
	a 2小 学力向上に向けて、中学校区で共通の研究主題を設定し、これまでの3年間で言語活動の充実の観点から学習指導の方法を考えたり、義務教育9年間を見据えて、各教科の指導プラン（学習の系統性）を作成して活用したり、3校合同授業研究会を実施したりした。	ワークショップ型の話し合い活動を小中学校で取り入れて指導を行うとともに学習のまとめを子ども自身で作らせるようにした。	中学校区で導入の工夫を入れていることにしている。
B 中学校区	B中 中学1年では、小学校の内容の復習を多く行っている。		年間5時間程度小学校6年生が中学校へ体験登校を行なっている。
	b小 ・中学校のサマースクールに小学校職員が参加し、小学校の内容が十分理解できていない生徒に対して指導や声掛けを行っている。		・中1ギャップの解消を図り、中学校進学に対して不安を解消することで、中学校入学に向けた意欲の喚起を行うことを目的として、6年生が登校から下校まで1日中学校で生活する習慣を年間に2回程度設定し、中学校の教師と小学校の教師によるITでの授業を行う。
C 中学校区	C中 NRT分析を、小中合同教科部会で、落ち込みのみられる部分に重点をおいて指導している。		小学校に出向いて、中学校での学習の仕方等を話す機会を設定している。
	c 1小 ・授業研究会を設定している。 ・算数・数学科において共通した「ノート作成のきまり」を設定し、共同実践を行っている。	「活用する力」に関する授業研究を行っている。	特に算数・数学科において、授業の終盤に習熟をはかる時間を設定し、教師はできるようになったことをほめるようにしている。
	c 2小 業前の時間を活用して国語、算数を中心として、プリントやドリルに取り組みさせる時間を設定し、全職員で指導にあたり、基礎的基本的な内容の定着を図っている。	表現力については、業前の時間を使って、学年部ごとに発表の機会をつくり、音読や朗読の発表、合唱や楽器演奏などを実施している。	
D 中学校区	D中 小中合同の主題研究のもと、業前に時間を設け、基礎・基本的な知識・技能の習得を図っている。	言語活動に着目した取組を行っている。	
	d小 小中合同の主題研究のもと、業前に時間を設け、基礎・基本的な知識・技能の習得を図っている。	発表の仕方など中学と共通のものを作成し、指導している。	中学校の先生に授業に入ってもらい、(高学年 5年 外国語、6年 外国語、算数、4年 理科) 学習意欲を高めている。
E 中学校区	E中 学力向上合同研修会にて検討している。	ICTを活用している。	ICTを活用している。
	e小 ICT（教育）を活用した学力向上を同一テーマで実践している。 研究テーマ「ICTを活用した学習指導の在り方」～機器の操作と効果的な活用方法の探求を通して～	同上（ICT（教育）を活用した学力向上を同一テーマで実践している）。 研究テーマ「ICTを活用した学習指導の在り方」～機器の操作と効果的な活用方法の探求を通して～	同上（ICT（教育）を活用した学力向上を同一テーマで実践している）。 研究テーマ「ICTを活用した学習指導の在り方」～機器の操作と効果的な活用方法の探求を通して～
F 中学校区	F中 「学習のきまり」を作成し、基礎学力の向上を目指している。	「活用する力」をテーマに小中合同で研修会の実施	
	f小 「学習のきまり」を作成し、基礎学力の向上を目指している。	「活用する力」を身に付けさせる」ことを研究テーマとして掲げ、計画的に研究授業を実施し、参観したり、ワークショップ型の事後研究会を取り入れたりしながら、思考力、判断力、表現力の育成を図ろうとしている。	
G 中学校区	G中 単元別の学力検定問題を作成し実施することで、苦手としているところや理解が不十分なところを明確にし、その内容を復習する機会を設けている。	小中一貫した「問題解決的な学習の流れ」を作成し、実践している。	兼務教員による小学校での継続的な授業の実施、兼務教員以外の教員による小中合同参観（小中交流授業）等における小学校の授業の実施を通して、学習への意欲を高めている。
	g小 ・スキルタイムを設定し、計算・漢字等の繰り返し指導を行っている。 ・読書タイム（朝の活動20分間、週2回）、読みかせ（地域ボランティアの方による、朝の活動20分間、月2回程度を設定し、読書活動を推進している。	・授業において、問題解決的な学習を支援している。 ・自力解決の時間の確保や活字等の活用により、自分の考えをもち、表現し、話し合うことのできる指導の工夫を行っている。	・立腰指導（聞く姿勢の徹底指導）や授業での導入段階の指導の工夫により、学習意欲の向上を図っている。 ・授業での児童ひとりひとりへの声かけや賞賛を行う。
H 中学校区	H中 NRT、CRTをはじめとする諸検査の分析を行い、小中合同で基礎・基本を習得させるための学習を実施している（各教科及び長期休業中等）		知育部、徳育部、体育部、食育部において、小中合同部会を開催し、特に知育部と徳育部を中心とした教育の実践を推進している。
	h 1小 ・「学習のきまり」を小中合同で作成し実践している。 ・プリントコーナーを小中合同で設置し実態に応じて活用させている。	協同的な学習を位置づけた問題解決的な学習過程を小中合同で実践している。	協同的な学習を授業に位置づけ、グループ全員が助け合い、同じ目標に向かって活動する雰囲気づくりが心掛けている。
	h 2小 中学入学期に小学校の内容を復習している	各種の校外のコンクール等に積極的に参加している	中学校への一日入学を年2回、計5日取り入れている
I 中学校区	I中 ・小学校卒業時に春休みの課題を4教科課している ・個別指導	問題解決的な学習を展開している	導入で生徒の興味・関心を高める工夫をしている
	i小 1. NRTの分析 2. 家庭学習の充実	1. 論理的に説明する機会を一単位時間に必ず設定する。	1. 導入の在り方を研究している（主題研究において）

	Q14 <学習習慣を身につけさせるために>	Q15F A (小中一貫教育における困難や課題)	
A 中学校区	A中	望ましい学習習慣を身につけさせるために、小学校から9年間一貫して継続指導を続けている。	
	a1小	・共通の家庭学習の手引きを活用している。 ・「立腰指導」に合同で取り組んでいる。	
	a2小	中学校区で共通した学習習慣の中から腰背を立てた、立腰指導を行っている。 中学校区で共通した学習習慣の中から腰背を立てた、立腰指導を行っている。9年間育てるポイントを示して家庭に配付し、定着を見届ける週間を毎月位置付けている。	中学校区での合同研修会を年間10回計画しているが、もう少し回数を増やせるかどうかを今後3校の教務主任で検討していきたい。教育課程に合同研修会の計画を今後も入れていきたい。
B 中学校区	B中	9年間つかえる「家庭学習の手引き」を作成し、配付している。	
	b小	・9カ年を見通した話し方や聞き方、立腰指導等について「基本的な授業の受け方」を作成し、共通理解を図りながら指導の徹底を図っている。	
C 中学校区	C中	小中合同で作成した家庭学習の手引きを学年別に再編集（1～4、5～中1、中2～中3）して配付している。	
	c1小	家庭学習の手引きを作成し、各家庭に配付している。また、家庭学習ふりかえり週間を設定し、学習習慣が身につくよう、指導している。	
	c2小	小中一貫教育の取組の1つとして、小1から中3までの発達段階に応じた「家庭学習の手引き」を作成し、各家庭・児童・生徒に配付し、啓発を行っている。年度当初の参観日でも懇談会の内容として取り上げ、説明して啓発を行っている。	
D 中学校区	D中	家庭でのよりよい生活リズムを身につけさせるため、定期的なアンケートを行っている。	一貫教育の名のもとに、児童生徒のハードル感覚がなくなり、先輩や後輩としての態度が身につかなくなっている。
	d小	中学校とのつながりを考え9年間を通した「家庭学習の手引き」を作成し、徹底を図っている。	
E 中学校区	E中	立腰に力を入れている。	
	e小	小林市の施策に則り、同上的ような共通実践を行っている	小・中一貫でICT教育の指定研究を受けているので、合同の研修も計画的に実施されている。小林市では以前から市教委の施策として、小中一貫教育が進められているので、協力体制や意識は良好と感じている。
F 中学校区	F中	小中一貫した「生活のきまり」「学習の約束」を指導している	
	f小	「家庭学習の手引き」を作成し、全家庭に配付している。	・交流授業等を行う際の時間の確保 ・小中一貫教育が学力向上の手立てとして有効かどうかの検証
G 中学校区	G中	9年間を見通した「家庭学習の手引き」を作成し、家庭に配付している。また、保護者と児童・生徒を対象に「家庭学習診断表」による家庭学習の状況調査を行い、中間報告等を通して啓発を図っている。	
	g小	9年間を見通した「自学の姿」を意識させるために、「家庭学習の手引き」を作成し、児童生徒や保護者に配付し、啓発するとともに共通実践をしている。	
H 中学校区	H中	小中合同で家庭学習の進め方について検討し、手引を作成し、実践している。	
	h1小	・「家庭学習のきまり」を小中合同で作成し実践している。 ・PTAと連携した学力向上への取り組みを行っている。	
	h2小	好ましい自宅学習時間を各学年毎に設定し、守るよう指導している	
I 中学校区	I中	「家庭学習の手引き」を小中合同で作成中	
	i小	1. 家庭学習の手引きをH23に作り家庭に配付している。平成24年度に小中一貫したものも作る計画である。	

(2012年10月9日受理)